
半枯れトリオの旅日誌【中国・上海編】

一二三四

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

半枯れトリオの旅日誌【中国・上海編】

【Nコード】

N8858X

【作者名】

一二三四

【あらすじ】

恥も外聞もかなぐり捨てたオヤジ三人組、一家の恥、村の恥、延いては日本の恥と蔑まれても、今日も行きます地の果てまでも……。まだ枯れるには早過ぎると自らを鼓舞するも、精々が中途半端な生乾きの三人組どすえ。

一夜干しの干物はうまいよね。

人間も同じで、うまさのグツと凝縮された、生乾きの半枯れオヤジが一番おいしいどすえ。

もちろん、酸いも甘いも噛み分けたオヤジだからこそ出せるうまさ

どすえ。

ぜひ一度、味わってみてください。

それではご紹介いたしましょう。

まず始めに控え^{ひけ}しは、一見冷静沈着な二枚目“エロ河童”こと峪口真一どえす。

次に控え^{ひけ}しは、機関銃のごとき口撃が売りの“エロハゲ”こと施川克己じゃ。

最後に控え^{ひけ}しは、日本の農業は俺あ（オラァ）に任せろと意気込む“エロ熊”、或いは“エロ豚”こと邑中和年だ、ど。

三人三様、個性豊かな半枯れオヤジの珍道中第一弾、“半枯れトリオの旅日誌【中国・上海編】”だけんど、あんまし期待しねえでくんど。

ああ、ふんだ、言い忘れつとこだった。

この駄文はよお、他のサイト（無料のネット小説サイト）にも載ってっからよお。

邑中談

第一章 東風吹かば（前書き）

或る年の二月、たにぐちしんいち 峪口真一の四十年来の友、せがわかつみ 施川克己とむらなかかずとし 邑中和利が週末を利用して上海へ遊びにやって来た。

峪口は仕事の関係で上海に駐在し、すでに数年が経過していた。

施川と峪口は高校時代からの親友で、家が近いこともあり、学生時代はもとより就職してからも毎日のように顔を合わせていた。

年齢は当然のことながら同じだが、二人の性格はまるで正反対、それがまた長い付き合いの続いてきた理由かもしれない。

性格も正反対なら体型も対照的で、峪口は痩せ型で長身、施川はずんぐりむっくり型だが、最近では年齢相応の腹の出っ張りが互いに気になっていく。

峪口と邑中和利は保育園からの同窓ということになるが、本格的な付き合いは高校生になってからである。

邑中はそれこそヤンチャで、保育園を二ヶ月で退園させられた武勇伝の持ち主である。

峪口と施川は定年間際の会社員だが、邑中は三十二歳で地方公務員を辞め、大農家の経営を引き継いだ。

邑中の体型は、施川をひと回り大きくしたアンコ型である。

邑中の性格は又、峪口と施川の違い以上に異なる。

三人の性格が異なるが故に、四十年という永きに亘って付き合いが続いているのかも知れない。

今回の旅日誌では、施川と邑中が初めて訪れたときの珍道中を紹介する。

第一章 東風吹かば

第一章 東風吹かば

一、友の襲来

1

二〇××年二月の下旬、三泊四日の予定で施川と邑中が上海にやって来た。

その日、峪口は二人を虹橋空港まで出迎えた。

およそ二ヶ月ぶりのご対面である。

施川は顔を合わせるなり、まるで溜まっていたものを吐き出すかのように、一気に喋り出した。

飛行機の中で相当酒を飲んだ様子で、施川の口はいつにも増して滑らかである。

「オメエよくしゃべんなあ。女みてえだんべよあ」

「おお、なんだ邑ちゃん。あんたも遠慮しないでしゃべれよ」

「オメエがしゃべくりまくってつから、俺あ（オラア）口を挟めねえべ。オメエは少し黙ってろ」

「いや、悪い悪い。家の方は大丈夫だったのか？」

「オラアち（俺の家）かあ、この時期は野菜がねえから、でいじょうぶだあ」

三人は久しぶりの顔合わせに、それぞれの近況や家族について饒舌に語り合った。

もし、運転手が三人の会話を理解できたら笑い転げたことであろう。虹橋空港から峪口が住むマンションのある徐家匯までは、道路が混まなければタクシーで約二十分の道程である。

タクシーに乗って十分ほどすると、施川と邑中は急に黙り込んだ。

峪口が後ろの座席を振り返ると、二人は口をアングリと開けて眠り込んでいる。

さすがに旅の疲れが襲ってきたのであろう。

飛行機の時間から逆算すると、家を早朝の五時半には出ているはずである。

「着いたよ」

と言う峪口の声に反応して、施川がパツと目を覚まし、

「わし、寝てた？　ここどこ？」

と、とぼけた質問をしてから、首を二度、三度と廻し大きな欠伸をした。

「ほれ、邑、起きろ」

「あつ、ふうん……」

「あつ、ふうん、じゃねえよ。どうせスケベな夢でも見ていたんだろ。このまま日本へタクシーで送り返すぞ」

「タクシーじゃ日本へくれえよ。ほれ峪口、銭っ子」

「ったく、屁理屈ばかり言いやがって」

「ははは……、いいいいいよ、金はあるよ」

「いいべよ、ほれ銭っ子」

「峪口い、もらっておけよ。なんならわしが……」

「アホッ、オメエも少しは氣い使え」

「あつははは……、わしはいいンじゃ。わしと峪口はそんな関係じゃねえ。なあ、峪口い」

「いったい、どんな関係じゃ？」

「ほれ、見る」

「まあまあ、いいからいいから。後で飯代を出してくれ」

「わかったか、邑ちゃん」

「ふんじゃ、俺あと施川で夕飯代を出すべえ。な、あ、施川ちゃん

……」

「……、いい天気じゃ」

「まゝた、すつとぼけてよお」

「ほれほれ、いいから早く降りる。運ちゃんが困っているぞ。荷物、忘れるなよ」

タクシー料金は三十五元、峪口は四十元を運転手に渡した。

2

峪口は、マンションへの出入り方法について簡単に説明してから、二人を部屋に導いた。

「なかなか良い部屋じゃないか。それでも隠しているんだろう。奥さんに頼まれたからよ、どれどれ……」

などと勝手な事を言いながら、施川は遠慮もなしに各部屋を覗いて回った。

「おい施川あゝ、あんまし、他人の家ン中をジロジロ見るモンじゃねえどお」

「いいンじゃ、いいンじゃ。わしと峪口はそんな関係じゃねえ」

「だから、どんな関係じゃ？」

「こーんな関係じゃー!!」

と言いつつ、施川は峪口に抱きつき、腰を前後に卑猥に振るった。

「こらっ！ 止めるッ！ こらッ！」

「へへへっ……、いいじゃねえか。ウリウリウリ……」

「あれえゝ、オメエら、そうゆう関係だったのかあゝ」

邑中が疑りの表情を作った。

「バカッ！ 止めるつて。邑中が誤解するじゃねえか」

「もう誤解しちゃったモンねえ」

「焼餅焼くなよ」

「バゝ力、俺あにそんな気はねえ」

ひと通り部屋を見終えた施川は、ソファーにゴロリと横になり、

「酒はある？」

と訊いた。

「あるにはあるけど……、あんた、まだ飲むの？」

「ふんとに、俺あ恥ずかしくつてよ。飛行機ン中で、なんけえもなんけえも> “ビールだ、ワインだ” って頼むんだもんよあ」

「そうかそんなに派手に遣ったのか？」

「うんだ。俺あもう小ッ恥ずかしくつて、^{けえ}帰りの飛行機に乗れねえよあ」

「そうかそうか、こつちへ残るかあ。いいこつちや。峪口い、熊をよろしくな」

「もう止めておけよ」

「なにをおっしゃいますやら。せつかくの休みだ、酒ぐらい飲ませるよ。おつ、良い酒があるじゃん」

と、サイドボードのウイスキーを目ざとく見つけた。

「これッ！ これは君が飲むような酒じゃない」

「わしにはもつたいない、か。へへへっ…、氷ある？」

「はいはい、ございますよ。水は？」

「水ッ！？ こんな良い酒にい、バカをゆっちゃいけません。それこそもつたいいねえ。そうそう、わしも土産持って来たからな」

「施川がなかなか出さねえから、持ってけえるつもりかって、俺あしんぺえしてたんだあ」

「俺はまた、テメエの飲み分を持って来たのかと思ったよ」

「へへへっ…。それもあ。酒とタバコ、土産を奮発しといたからな。シーバスの十八年ものだぜ」

「俺あも半分出したんべえよあ」

「あれえゝ、そうだっけえゝ」

「はははは……、二人ともありがとう」

「この意地きたねえのに、礼はいんねえ。どうせ、自分で飲んじやうんだからよあ」

「かも知れねえな、はははっ…」

「ツマミ、なにかある？」

「買ってあるよ。ちよつと待ってナ」

「タバコの吸殻でよかんべえ」

施川はロツクで二杯、三杯と呷り、饒舌に喋っていたが、少し眠くなつたと言つて目を閉じた。

「まてまて、ベッドで寝ろよ。ちゃんと用意してあるから」

「いい、ここでいい。面倒くさい」

「峪口いゝ、その辺へおつ転がしとけばいいよあ」

峪口は鼻を鳴らし始めた施川に毛布をかけ、邑中に言った。

「俺は会社には顔を出してくるから、テレビでも視ていてくれよ。六時過ぎには戻れるから、後で飯を喰いに行こうよ。このうるせえのも頼んだよ」

「うん、わかつた。この喧しいのもでえじょうぶだ」

施川が寝ぼけた声で、うんうんと頷いる。

鼾は廊下まで聞こえていた。

3

午後六時の終業を待ち兼ねた峪口は、従業員への挨拶もそこそこに会社を飛び出し、タクシーでマンションへと急いだ。

部屋に戻ると、案の定と言うべきか、施川がいない。

机の上には数本のビールの空き缶と氷の溶けた水割りグラスが置かれていただけだった。

「邑中、あいつは？」

ソファで鼾を掻いている邑中の肩を揺すった。

「あつ、うつふん……。もう喰えねえ……」

「おい、起きろよ」

「うむむむ、あつ、峪口いゝ、けえったのかあ」

「ああ、ところであいつは？」

「うん……？ ウンコでもしてンだべえ」

「いや、いない。どこにもいない。靴がないから外へ行ったンだろ
う」

「あれえゝ、ぜんぜん気いつかねえかつた。あのバカ、どっかへ

行つたんだ」

「そうか……、まあ、そう遠くへは行かないだろう」

峪口は、下手に探し回るよりはと考え、部屋で施川の帰りを待つことにした。

三十分ほどすると、電話の呼び出し音が鳴った。

受話器を取ると、ガードマンからだった。

「わし、わしじゃ。中へ入れてもらえないんだけど、なんとかしてちょうだい」

と心細げな声。

峪口がガードマンに電話を代わらせ、“俺の友人だ”と言うと、“オッケー、オッケー”と直ぐに納得してくれた。

部屋に戻った施川が、

「出たときとガードマンが交代していたんだよ」

「ここは管理がしっかりしているからな」

「それにオメエは人相が悪いかな」

「なんとということを、精錬潔白、人畜無害が売りのこのわしを捕まえて……」

「厚顔無恥の間違いだんべえ」

「おつ、邑ちゃん、うまいことゆうねえ」

「へへへっ…、違いねえ」

「ところでどうする？ 梨田総経理と一緒に食事しないかって言っているんだけど」

「梨田社長が……でも、わしらもいいの？」

「誰だあ、梨田社長ってナ？ 俺あ知ンねえけど。梨田総経理って人も知ンねえ」

「同じじゃ、アホ。まあ、わしは面識あるけど、こっちの野生熊もいいのか？」

「野生熊ってナ、俺あのことかあ……」

「あつ、悪い悪い。熊が気を悪くするわ」

「もちろんだ。二人のことは話してある。社長がぜひ二人も一緒に

って、言ってるんだから」

「そうか、断わるのもなんだしなあ。おい熊、というわけだ」

「よし。うんじゃ、着替えて行くべえ」

「このままじゃ、ダメエー？」

「バゝカ、グズグズゆってねえで、オメエも着替える。峪口に恥
かせんじゃねえ」

「へいへい。わかりやした」

「急いでくれよ。七時の約束だからな」

三人はマンションの前の“華山路”に出てタクシーを捕まえた。

「ところで、どこで食事するの？」

「ガーデンホテル花園飯店の“白玉蘭”さ。高級中華料理店だぜ」

「へーえ……」

「高級なラーメン屋かあ。俺あ五目ソバが好きだな。あれもあつか
な、あれ？」

「あれじゃわからんだろうが」

「あれだよおゝ、あれえゝ」

「だからなんだっていうの？」

「高級中華ソバ屋ならあんべえ。ほれ、あれだよ、マ、マーボ豆腐
丼」

「……………」

「峪口、放っておけよ」

「ははははっ…、あるよ。総経理は花園飯店に住んでいるんだよ」

「さすがに違うなあ、わしらとは」

「まあな。俺みたいにマンションへ住んでもらってもいいんだけど、
世話が焼けるしね」

「ふふふふっ…。一時間ごとに電話がかかってきたりして」

「あのホテルは日本語でまったく心配ないから。それに社長はV
I P待遇だからね」

「そつなの？」

「うん。あのホテルは、日本のオークラホテルが経営しているんだ

よ。総経理は日本でも昔からよく使っていたようだし……。それに、ほら、自分の結婚式もやっただろう」

「なるほどねえ。我々庶民とはお金の使い方が違うわけだ」

「まあ、そうゆうことだよ」

二、高級中華レストラン“白玉蘭”

1

タクシーはホテルの正門から入り、正面入口前に停車した。直ぐにボーイが飛んできて、ドアを開けてくれる。

峪口も出張時には定宿にしており、今でも時々お客様の接待などに使用しているので、顔見知りの従業員も多い。

ロビーから電話で梨田に到着を告げ、エスカレーターで二階に上がり、踊り場に常設されているソファで待った。

「そこがバイ、バイ……なんだっけ？」

バイユラン
「白玉蘭」

「ハクギョ克蘭、か。わりと入口は小さいんだね。でもあの壺、タツかそう」

白玉蘭の入口には、高さが一メートルほどで赤い唐草模様の描かれた一対の壺が置かれている。

入口は小さいが、店内は驚くほど広い。

ソファが暖まる前に、梨田がエレベーターから姿を現した。

背中にセーターを背負い両袖を前に垂らした、いつものお気に入りスタイルである。

「ああ、施川さん。お久しぶり。お元気ですか？」

と、施川の緊張をほぐすかのように、梨田は優しく声をかけた。

「お久しぶりです。今日はすいません、私まで……」

それでも施川は緊張気味に応えた。

「こちらが先ほどお話した、私の友人の邑中です」

「は、初めまして、峪口くんのお友達で、む、邑中と申しますう」

「おっ、ほぼ標準語だ」

「う、うるへえ」

「くくくっ…、峪口君とは保育園からの付き合いなんですか？」

「うんだあ。ふんでも俺あ、直ぐにやめちまったから……」

「邑ちゃん、言葉は正確にね。退学じゃねえや、退園になったんでしよう」

「施川あ…、オメエはほんとにうるせえなあ」

「総経理ありがとうございます。お招きをいただきまして……」

「あつ、いいのいいの。峪口くんの顔は見飽きているから、偶には違う人たちと食事をしたかったの。ふふふっ…、さあさあ、中に入りましょう。予約してありますから」

入口を入るとチャイナドレス姿の小姐（女性従業員）が出迎えてくれる。マネージャーと思しき黒い制服に身を包んだ女性も出迎えに出て来て、

「梨田様、いつも当店をご利用いただきまして、ありがとうございます」

と丁寧な日本語で挨拶をした。

梨田もニコニコと照れたように応じる。

入口付近では二胡と中国琴を使った演奏が奏でられ、哀愁を帯びた少し悲しげな音色が流れている。

「いい雰囲気ですねえ。それにホテルも素晴らしい」

施川が梨田に感動を素直に告げると、

「うん。ここの中華料理は美味しいよ。日本や香港の味に近いんだ。どうも街中の料理って、僕には合わなくてね。うふふふっ…」

「そっ、そうでしょう。いつも一流のお店に行かれていますのですね。うから……」

「そうでもないんだけど、……どうも衛生状態が気になってね。峪口くんたちは平気なんだよね。ねえ、峪口くん？」

「ええ、どうせ私なんか、元々がそういう下賤の育ちですからねえ」
峪口がいじけた素振りで答えると、

「うふふふっ…、まあまあ、いじけないの」

「いじけるもなにも梨田社長と我々では、いや、とてもとても。特にこの野生熊などは、なにを喰らっても中つたことはありません。特
なあ、邑ちゃん」

実に調子のいい男である。

「やせいくま？」

「へへへっ…、邑ちゃんの愛称です」

「俺あ…、俺あもときどきは中るど。こねえだも、冷蔵庫ン中の残り物喰って豪い目にあつたもんだあ。母ちゃんがもったいねえから、喰え喰えってゆうもんだからよあ。後で、“いつのもんだあ？”って訊いたらよあ、“わかんねえ”ってゆうモンだから……」

「話が長い」

施川が焦れたに邑中の話を遮った。そして、
「オマエさんとは愛がないンじゃないの」と付け加えた。

「ふんなこたあねえ。ここへ来る前の晩だって……」

「はい、ストップストップ。危ない男じゃ」

「ふふふっ…、邑中さんて面白い人だね」

2

ひと口に中華料理と言っても、上海風、北京風、広東風、四川風、或は香港風や台湾風といろいろあつて、一般的には日本で食べる味とはかなり異なっている。

峪口は、香辛料、特に“八角”と香草に原因があると考えているが、慣れるにしたがい日本の味では、却って物足りなくなってくるから不思議である。

八角はダイウイキョウの実、香辛料の一種で形が八角の星形をして

いることから名付けられた。

「うふふふっ…、色っぽいでしょう」

「なっ、なんですか、急に」

「ほら、彼女たちのチャイナドレス……」

「ほらほら施川、卑猥な目で見るなよ」

「えっ、わしは人畜無害じゃ」

「ほれ邑ちゃん、涎、涎」

と、峪口が邑中を茶化すと、

「あ、うん……、出てねえべよお」

口角を慌てて手で拭ってから応えた。

「総経理も涎、涎」

「うふふふっ…」

小姐（女性従業員）の身に着けているチャイナドレスには深いスリットが入っていて、歩くたびに太ももがチラリ、チラリ、男性には真に目の毒である。

大きな丸テーブルではなく、奥まった四人掛けの四角いテーブル席に案内された。

四人では少し狭い。

白玉蘭の料理は大皿ではなく、フランス料理さながらに、一人前ずつ取り分けて別々の皿で供される。

使う箸とスプーンは錫製、テーブルクロスやナプキンも真っ白で糊の効いた清潔感溢れるものだった。

「ねっ、料理は雰囲気が大切なんだよ。確かに、街中にも美味しいお店はあると思うけど、なにか不潔っぽくてさあ」

峪口が昼食時に一度、無理に市中の食堂へ梨田を誘ったことがある。そのときは“美味しい、美味しい”と食べていたが、以後、峪口がいくら誘っても梨田がその店に足を運ぶことはなかった。

「さあて、今日はいいものを食べちゃおうかなあ」

梨田は食道楽、美味しいものには目がない。

日本中の評判の店を食べ歩き、時にはヨーロッパまでも出かけて行

く。

人間が一生に食べられる食事の回数は限られている。だから、一度たりとも無駄にしたくない、と言うのが梨田の口癖である。

昼食を駅の立ち食い蕎麦で済ませ、夜は“ビールさえあればなんにもいらない”、とゆーいい加減な食生活を送ってきた峪口も、梨田と付き合い始めて考え方が少し変わった。

但し、お小遣いの関係で、全面的に変えることはできない。

「はい。ご馳走様です」

峪口と施川が満面に笑みをたたえて応じると、

「いいよ。なんでも頼んでください」

「フカヒレ 鰻鰯”…… なんか、よろしいですか？」

わざと遠慮深げに問う峪口に、

「姿煮、いっちゃおうか」

梨田は菜単から目をあげると、ニコリと微笑んでから、

「おつ、“燕の巣”もある。これはデザートにしよう。お姐さん、お姐さん」

と小姐を呼んだ。

「ねえ、鰻鰯の大きさはどのくらい？」

このくらいです、と小首を傾げ片手を広げて答える小姐に、

「じゃあ、四人分ね。ふふふふ……。あとねえ、そうマーボ豆腐、それから、これ美味しそうだなあ」

と、写真を指し示した。

「豚三枚肉の柔らか煮でございます」

この料理は、そのまま食してもうまいが、蒸饅頭と一緒に食べると醤油ダレの濃さがちょうどよい具合に緩和され、より一層うまさ引き立つ。

「それをもらうわ。スープはなにがあるの？ えっ、スッポンのコンソメ味。じゃあ、それも四つね」

そこまで注文して梨田は、

「なにか食べたいものがあれば頼んでいいですよ」

菜單に見入っている三人に声をかけた。

三、燕の巢

1

「なあ、ツバメのスつて、なんだあ？」

邑中が小声で囁く。

「燕の巢だよ」

施川が呟くように応える。

「その前に、総経理、ビールを頼みませんか」

「ビールか、どうしようかなあ。少し糖が出ているつて、お医者さんに言われているんだよねえ。……ええいッ！ 今日飲んじゃえッ！」

「それじゃ、総経理は一杯だけにしていただいて、我々がその分も飲みますから、どうぞご安心ください」

「なにがご安心くださいだよ。普通は上司が飲まなかったら遠慮するものだよ。ねーえ、施川くん？」

「はっ、はい。ごもつともです」

「ふふふっ…、冗談、冗談。どんどんやってちょうだいよ」

「それではお言葉に甘えまして、私はこのマナガツオの燻製風つてやつをお願いします」

と峪口が言つと、

「施川くんもなにか頼んでください」

「はい。それでは、ええと、こ、この海老の水晶炒めをいただきます」

「いいよ、いいよ。どうせ割り勘だからどんどん頼んでください。うふふふっ…」

と、悪戯っぽく笑った。

「えッ！」

「施川、冗談だよ、冗談。社長の得意技さ」

「うふふふっ…、邑中さんもどうぞ」

「はい、ありがとうございます。なあ、施川あ……ツバメって鳥の燕かあ？」

再び小声で囁いた。

「ああ、そうだよ。空を飛ぶ燕だよ」

「ふんで、スつてのは、巣つこのことかあ？」

「うん、そうだよ」

邑中と施川が小声でやり取りをしている。

「うんだってオメエ、燕は家にも毎年来っけど、巣は泥でできてんだぞ。ど、泥を食うのかあ！」

と、邑中が驚きの声をあげた。

「バゝ力、種類が違うんだよ」

「泥の種類が違うんかあ……」

と、二人のやり取りが耳に入った梨田が、

「邑中さん、燕の巣っていうのは、本当に燕の巣のことなんですよ。こうなんていうのかなあ……ゼラチン質でとても美味しいんですよ」
峪口がそれを受けて、

「テレビで見たけど、フィリピンとかの小島に住んでいる燕の巣なんだよ。主に洞窟なんだけど、それがとんでもない断崖絶壁で、そこをよじ登って採るんだけど、落ちて毎年何人も死ぬらしい」

と説明すると、

「あつ、わしも見たことある。竹で足場を組むんだよな。それで百メートルぐらい登っていくんだ。だから時々は落っこちて死ぬんだ。でも、誰でも採れるわけじゃなくて、ヤクザの親分みたいな権利を持った奴がいるんだよな」

と、施川が付け加えた。

「あつ、そうなの」

「上海でも薬局なんかに売っていますね。めちゃくちゃ高いですけど」

「うんまかったら買つて帰^けえんべえ」

「あつはは……、無理無理」

「ふんなことねえよあ。銭っ子はあんど」

「いや、そうじゃなくて、料理が難しいんだよ。俺は鱻^{さかな}をを買つて帰つて家で調理したことあるけど、時間ばかりかかって喰えたモンじゃなかった」

「ふん」

「峪口くんはなんでもやるんだねえ」

「ええ、そうなんですよ。結構、料理は得意ですよ」「人間、なんか取り得があるモンだな」

「じゃかまし」

「うふふふ……、ところで、お姐さん、今までに何品頼みましたか？」

小姐の“六品でございます”との答えを聞くと、三人の方を見ながら、

「ここはボリュームが少な目だから、炒飯か焼きソバを頼もうか。

ねえ、みんなはどっちがいいの？ どちらか一皿取つて分けようよ」

「はい、私はどちらでも結構です。社長のお好きな方をお選びください」

と施川が答えると、

「俺あ、両方喰いてえ」

「ほらね、峪口君。施川さんはちゃんとしているよ、誰かさんと違って。えッ!？」

「へいへい、それは悪うございました。くくく……」

「うふふふ……、じゃあ、“ネギ焼きソバ”と“揚州炒飯”の両方を頼みましょう。美味しいんだよねえ、これが……。うふふふ……」

どちらかというと日本蕎麦風の食感で、ラーメンの麺のような腰はない。

その麺を茹でて、葱をじっくりと炒め、葱のエキスが染み込んだ油と醤油に絡めるだけである。

揚州炒飯は日本でもお馴染みの炒飯で、卵にハムの賽の目切り、刻み葱にグリーンピースといった簡単な具を使い、味は塩で調える。

ネギ焼きソバは街中の食堂で五元（七十五円）前後と安い上、葱の芳ばしい風味が気に入って、駐在当初、峪口たちは昼食としてずいぶんお世話になった。

「そうだ。お姐さんねえ、デザートに燕の巣ね。甘いやつ。そう、これね。うん、それも四つお願いします。いいよね、みんなも？」
「はい、ありがとうございます」
ようやく注文が終わった。

四、デザートは“蛙の死亡”？

1

「施川あ…、これこれ、雪蛙の脂肪だつてさ」

峪口が菜单の写真を示しながら語りかけると、

「なに、カエルの死亡……、まあ、生というわけにはいくめえな」と、かなりいい加減に応じた。

「死亡じゃないよ、脂肪だよ」

「あんだ、ゲエロがどうした？」

「蛙、雪蛙って蛙の脂肪が、デザートに食材に使われているんだよ」
梨田もどれどれと、もう一度菜单に目を落とした。

「そういえば以前、“名軒（高級中華レストラン）”でセットメニューになっていて、知らずに食べさせられたことがありましたね」
「あった、あった。デザートに杏仁豆腐の具材として入っていたン

だよ。聞いてびっくり、玉手箱。うふふふっ……」

知らなければ、ゼラチン質でデザートとして他の食材と違和感はない。

だが、蛙と聞いた途端、全員が“うえッ！”となつてしまった。

「赤ゲエロは焼いて食うと、寝シヨンベンの薬んなるんだ。俺も餓鬼ンとき、ばあちゃんに喰わされた。峪口もそうだんべえ」

「うん、まあねえ」

「あつ、峪口、しらばっくれえーて」

「うるさい」

「他に蛙の卵というのもあつたね」

「それこそゼラチン質そのものです。梨田社長は蛙の卵って見たことありますか？」

と施川が訊いた。

「そりゃ、あるよ。子供のころは、夏休み間中、野田のお祖父さんのところで過ごしたもの。周り中、田圃ばかりだろう。それにお祖父さんの家にも大きな堀があつたしね」

そこへ小姐がビールを運んできたので、四人は話しを中断して喉を潤した。

「さっきの話ですけど、社長の御本家は私たちの家とあまり変わらない環境ですね」

「峪口君の家は運河だろう。そしたら四、五キロじゃないの」

「そんなものじゃないね。施川の家も私の家から一キロぐらいのもです。邑中の家だと四、五キロはあるかな……」

「へーえ、そうなんだ。三人は幼馴染なの？」

「邑中とは保育園からですが、施川とは高校二年のときからです。施川はもともと柏の方でしたから、それまでは接点がなかったんです」

「へーえ、柏だったの……」

「邑中さんは？」

「大畔っていいいます。峪口とは同じ学校区なモンで、それで、保育

園から中学校までは一緒なんですよ」

「あつははは……、保育園の付き合いは短かったけれどね」

「しッ！ 止める」

邑中が慌てて峪口を制した。

2

「へへへっ……、退園させられたんですよ」

施川が口を挟んだ。

「あつ、バカ」

「ええッ！ 退園、退学つてことを……。なんでえ？」

「婦女暴行」

「ええッ！」

「バ、バカ。バカこくでねえ」

「うふふふっ……、いくらなんでもそれはないよねえ」

「ふんとにこの男はバカで、オメエ（施川）じゃあんめえし」

「ちよつと元気が良過ぎただけだよな」

「うんだ」

「うふふふっ……、滅多に聞けない経歴ですね」

「あつははは……、まあ、全国的にもそうはいないでしょう」

「わーかったつてばあ。もういいよお」

邑中が顔を赤らめて遮った。

「施川君とは高校に入ってからとの付き合いなんだ？」

「ええ、そうです。こう見えても中学までは短距離の選手で、近隣ではけっこう有名で、ずいぶんもてたらしいですよ。まあ、今じゃ面影もないですけどね」

「こう見えても、はねえだろう。へへへっ……」

「うふふふっ……、そうなの？」

「はい。千葉県でベストテンに入っていました」

「ええッ！ それはすごい」

「自己申告だんべえ」

「じやましいーッ！ 正真正銘のサラブレットじゃ」

「はっははは……、今はどう見ても道産子だけどね」

「ふんだあ。足はみじつけえし、デブだしよお。走んの見たことねえもんなあ」

「へいへい、今更証明もできねえしな」

「うふふふっ……、僕は信じます」

「えッ！ ありがとうございます。どうだ、さすがに梨田社長は君たち下賤の者とはできが違う。人間性の問題だな」

「さちよう（社長）さん、あんましバカおだてねえでくんど。ただでせえ、お調子者モンですけえ……」

「ぷぷっ……、わかりました」

「あらあゝ」

ズツコケル施川の姿に、四人は声を揃えて笑った。

3

しばらくして小姐が、スッポンスープの入った大きな器を載せたワゴンを押して来た。

そしてスープを取り分け、各自の前に置いた。

それをひと口啜った梨田が、

「うーん。おいしい」

と言つて、三人にも飲むようにと勧めた。

スッポンのうま味がスープに凝縮されている。

街のレストランでスッポンスープを注文すると、土鍋の中に一匹そのままの姿で入っている。

中国人は甲羅を外し、頭と手足を？ぎ取って齧り付くのだが、どんなにうまい料理であっても、やはり見た目が肝心だと思う。

中国人の審美眼は日本人と違うのか、鶏でも亀でも姿のまま調理するのが好みらしい。

それとも、肉の状態では、なにを食わされているのかわからない、信用できない、ということからそのようにするのも知れない。

続いて豚三枚肉の柔らか煮、貝の形をした饅頭が添えられている。

「これをこう開いて、中へ、この、ほら箸でも崩れる。このトロトロに煮込んだ豚肉を挟んで食べる。これが実にうまいんだよね。ほら、みんなも食べてごらん」

と言って、梨田は食べ方を三人に見せた。

「こうですね。……なるほど、おいしいですね」

施川はすでに二個目に取りかかっていた。

醤油味ベースで黒酢を加えた濃厚なタレには、片栗粉でトロミがつけられている。

「ほれ、みつともねえからガツガツすんなよ」

邑中はいつも、他の人たちが食べるのを確認してからゆっくりと箸をつける。

「オマエが遅いんだよ。早く食わねえと、わしが全部喰っちゃまうぞ」

「うふふふっ…、足りなければまた頼めばいいよ」

鷹揚としたものである。

五、フカヒレ鰻鱈

1

「僕はウーロン茶にするけど、みんなは好きなお酒を頼んでください」

梨田の話し方は、その育ちの良さからくるのか、実におっとりしている。

「ありがとうございます。せっかくだから、紹興酒も頼んでよろしいですか？ 十八年ものなんか、如何でしょう」

「だめだめ。ここは高いんだから。八年もので十分だよ」

「小姐ッ！」

呼ばれて近づいてくる小姐に、峪口は紹興酒を温めるように指示すると、

「お砂糖は必要ですか？」

と小姐が訊いてきた。

「いや、いらないよ」

と峪口が言つと施川は、

「もらおうよ、砂糖を……」

と食い下がった。

「施川くん。まあ、とにかく飲みなさい。八年モンは砂糖なんか必要ないんだから……。本当は十八年ものがいいんだけど」

「ダメッ！ 八年もので十分。やっぱり僕も、少しもらおうかなあ」と梨田が応じたのに対して、

「ダメッ！」

と、峪口が切り返すと、

「あらっ」

と梨田は、ズッコケル仕草をした。

小姐も思わず含み笑い、三人も声を揃えて笑った。
気心の知れた友と飲む酒は実に楽しい。

2

峪口は、日本では温めた紹興酒にザラメなどを入れて飲むが、これは熟成度が少なく、刺激の強さを誤魔化すためだと考えている。

「ほんとだ、うまい。日本で飲むのとは全然違うわ」

施川が喜びの表情を満面に浮かべた。

「だろう。十八年ならもつとうまいよ」

あくまでも十八年ものにこだわる峪口に、

「ほんとうに峪口君はしつこいね。ねえ、施川くん」と同意を求める。

「ええ、そんなンですよ。しつこくて、しつこくて。参りますよ」

「ははは……、それにしてもなんですね。一年ものがあつて三年、五年、八年とあるわけですけど、なぜ次は十八年なんでしょうねえ」
「決まつてンべえよ。売り上げのためだんべえ」

「ふふふつ……、邑中君は簡単明瞭ですね。十年もの、十二年ものもありますよ。なんか、数字と関係があるンじゃないの」

「そうかもしれませんね。でも、一応、向学のために小姐に訊いてみよう、つと」

峪口は小姐を手招きした。

「わかった。いいよ、いいよ。……わからないそうです。マネージヤーを呼びましょうか、だつて」

峪口は必要ない、必要ないと繰り返し手を振った。

「あまり、困らせないでね。明日から僕が来られなくなっちゃうから。ふふふつ……」

紹興酒は瓶の封を切り、小さな徳利でひとり一人別々に出されるのだが、その徳利は更に大きなお湯の入った器にすっぽりと収められ、お燗が冷めない仕組みになっている。

「これ、この器、日本酒にもいいね。買つて帰ろうかなあ」

「止めた方がいいです。結局は物置の肥やしになるンですから。日本酒にはやはり日本の徳利が一番合うモンです。それが歴史というものです」

「いつもながら、峪口君の言葉には説得力があるねえ。いやあ、たいたしたもんだ。政治家にしたいくらいだ。うふふふつ……」

「峪口いー、市議員へでも出るか」

「はははつ……、それは邑中に任せるよ」

「……………」

「あれっ、邑ちゃん、本気？」

施川が邑中の顔を覗き込んだ。

「うん、そんな話もある」

「あつ、そうなのあ……。出るときにはゆつてね。日当五万、三食昼

寝付きで手伝うから」

「いんね。オメエに頼むンなら、まだ猫の方がマシだんべえ」

「がつははは……、それは正しい」

「おお、自分で言ってるよ」

「僕も手伝いたいけど、選挙区が違っからなあ」

「そんな勿体ねえ。梨田様にそんな、……お気持ちだけで結構ですらあ」

「あらあゝ、本気かよ。峪口いゝ、ほんとに出るつもりらしいぞ」

「うん。頑張ってるね」

3

やがてメイン料理ともいえる鰻鰯の姿煮が三人の前に置かれた。

「すごいですね。こんなの写真でしか見たことがありません」

施川が驚きの声をあげ、峪口も唯々ウンウンと同調した。

「ほんとうに鰻の姿がそのままだね。春雨みたいなのがスープの中で泳いでいるのは食べたことがありますけど、俺もこんなの始めてです。遠慮なくいただきます」

クルリと円を描いた、直径が二十センチはあろうかという鰻鰯を、繊維質に沿ってスプーンで大きめに切り取って口に含むと、トロミのついたコンソメ味のスープと口中で渾然一体となり、歯ざわりよりも喉をスルリと通り抜ける食感が楽しい。

まさに至福のとき、中国人ならさしずめ“口福”のときである。

しかし、贅沢な話だがいかにも一人前には多過ぎた。過ぎたるは及ばざるが如し。

「総経理、贅沢言って申しわけありませんが、少し多過ぎましたね」

「うん。そうだね。段々飽きてくるね」

「そんなことはありません。おいしいです」

施川はもうほとんど平らげている、相変わらぬ健啖ぶりである。

「そう、よかった。ほら、峪口君も食べなさい。なんなら、お土産

で持っていく」

「はははっ…、総経理、そんな恥ずかしいこと、言わないのッ!」

「うふふふっ…」

「持って帰えれんのかあ?」

「えっ、……できないことはないと思うけど……」

邑中の問いに戸惑う梨田。

「邑ちゃん、梨田社長が困っているでしょう」

「ふんでも、もったいねえべ。明日の朝飯に、これで雑炊作ったらうめえどお」

「なるほど、これで雑炊か。邑中さん、なかなかアイデアマンだね」

「確かに、贅沢な雑炊ができますね。ちょっと小姐に訊いてみよう」

「あゝあ、峪口まで、みつともねえなあ」

「ところが施川さん、中国ではそれほどみつともないことでもありませんよ」

「ほーれ見ろ。オメエは全部喰っちゃったから、明日の雑炊はねえどお」

「へへへっ…、わしはいらん。ビールがあればなんにもいらん」

などと言いながら、結局は二人とも全部平らげた。

「少し残ったけど、峪口君、持って帰る?」

と言う梨田の申し出に、

「いや、もう十分にいただきました。おい、施川あ、おまえもらえ
ば?」

と峪口は施川に振った。

「あ、いや、わたくしも、もう十分いただきましたから……」

施川が、余計なことを言うなとばかりに、峪口に目配せをした。

「総経理、後は、なんでしたっけ?」

「焼きソバと炒飯、それとデザート、かな?」

「なにか野菜も欲しいですね」

「いいよ。なにか頼めば」

「はい。小姐ッ! …… なにか、野菜のおいしいのある? 味付

けはあつさりとしたのがいいな」

小姐が菜单メニューを持って峪口のところへやって来た。

「これ、この写真の、クウシンサイだっけ？　そう、これもらうわ」
頷いて立ち去る小姐に、“峪口は急いでねえ”と言葉を投げかけた。
こうして二時間ほど楽しい時間を費やした四人は、梨田の招きに応じて三十三階のバーに席を移した。

窓側に席を取り、ホテルの庭園と果てしなく広がる美しい夜景を愛でながら、シーバスのロックを舐め舐め、夜更けまで四方山話に耽った。

白玉蘭の料金は二千数百元（約四万円）、シーバスのボトルキープが一本八百元、諸々のツマミをプラスして千三百元（約二万円）ほどであった。

この金額は日本人にとってもかなり高いものであるが、もしも中国人が聞いたなら卒倒すること間違いない。

なにしろ、上海での大卒の初任給は二、三千元なのだから……。

第二章 上海市内散策

一、徐家匯

1

峪口がカーテンを開けると天気は快晴、時刻も十時を少し回っていたので寒さも緩み、温かい日差しが部屋に射し込んでいた。

地理的にはかなり南に位置する上海だが、東京の気候とほとんど変わらず、時には雪が舞うこともある。

その日、遅い朝食を済ませ市内観光に向かった。

峪口は施川と邑中の訪問に合わせ、一日休暇を取っていた。

「今は暖かそうだけど、夕方は冷え込んでくるからな。防寒をしっかりとしておけよ」

「うん、わかった。東京とほとんど同じって聞いていたから、わたしは襟巻きと手袋を持ってきた」

「それは正解だ」

「俺あ聞いてねえどお。うんだから、コートも手袋もねえ」

「えッ！ 施川、邑中に伝えなかったのかあ？」

「あれ、わし言わなかったかあ……」

「オメエ、あれだんべよお。上海はかなり南だから、沖縄みてえに暖けえってゆってたんべえよお」

「わしがあゝ……、そんなことゆったかあゝ……」

「まーったく、いい加減なんだからよあゝ。オメエのを貸せ」

「へへへっ……、貸してやりてえとこだが、生憎わしはスマートだからな。邑ちゃんには着られねえよ」

「じゃあねえ、買っべえ。峪口い、どつか店へ連れてってくんどお」
「いいよ、俺のを貸してやるよ」

峪口は洋服ダンスからダウンジャケットとマフラー、それに手袋を

持つて来て、邑中の前に置いた。

「悪いいなあ。なくさねえようにすつからよお」

「気をつけるよ」

「あんだとお。オメエの所為だんべえ」

マンションを出ると、隣の“港匯広場”^{デパート}はすでにオープンしており、三人を喧騒の渦に包み込んだ。

「“味千ラーメン”か。平日のこんな時間帯なのに、ずいぶん客が入っているねえ」

「ああ、ここはいつも混んでいるよ。ほら、店先にもたくさんの椅子とテーブルが並べてあるだろう。昼飯時になると満席になって、一時間以上は待たされる」

「熊本って書いてあるけど、日本のチェーン店ってことだね。じやあ、味は豚骨ベースだな」

「うんめえのかあ？」

「熊本が本店ということだけど、実際には台湾に進出して、そっちから中国に入って来たみたいだよ」

中国で成功している日系企業を見ると、元々は日本で生まれたが台湾で成功した後、台湾人によって中国に進出というパターンが多い。台湾と中国は一触即発状態にあるといいながら、事業の面では交流が盛んである。

台湾人は、言葉が同じということもあるが、実に商売上手が多い。

2

「まあ、こっちのレベルではうまい方かな」

「俺あ聞いたことねえ」

「わしは仕事で熊本へ出張したときに、喰ったような気がする」

「へへへっ…、まーったく、調子いいんだかなあ、オメエはよお」

「バカもん、これは本当じゃ」

「ふん、じゃ、これ以外は全部ウソかあ」

「じゃあゝかまし」

「上海では去年一号店が出て、ここは確か、二号店だったと思うよ。もう、十店舗ぐらいあるのかな。なにが受けたのか、大人気だね。いや、うらやましい」

「へーえ、後で食ってみんべえか」

「いいけど。……せつかくだから、もつとうまいもの食おうよ」

「もつとうめえもんかあ。ふんでも、これも食ってみてえなあ」

「わしも食いてえな。うまいものは昨日、梨田さんに食わせてもらったからなあ」

「いやいや、昨日の料理はお金さえ出せば、日本でもどこでも味わえる味だ。今日はこつちでしか味わえないものを食おう。辛いものはどう？」

「わしは大好きじゃ」

「俺あもでえ好きだあ」

「そうか。それじゃあ、今日は“洞泉楼”へ行こう。部下に連れてってもらったんだけど、いやいや、ビックリ金時だった」

「なんじゃ、そらあ」

「それゆーんならよあ……、ビックリ金玉だんべえ」

「けけけ……、出しゃがったな、伝家の宝刀を」

「はっはははっ……、確かに負けた。君のはデッカイ、認める。この通りだ」

峪口と施川は邑中に頭をさげた。

「うんだあ……、わかればエエべえ」

男の勝負では、最後はなにのサイズが勝敗を分ける、こともある。「まあまあ、後のお楽しみ。それにね、明日はもっと楽しみが待っているかも知れないよ。……へーい！ タクシー！」

「峪口い、タクシーはいいから、少し歩こうぜ」

“華山路”でタクシーを停めようとした峪口を、施川が遮った。

「うん、そうか。それじゃあ、港匯広場の下が地下街になっていて、いろいろなお店が出ているから、そこを冷やかしながら向こう側に

渡ろう」

「うへえ、歩くのかあ。くたびれんなあ」

邑中が不満の声をあげた。

「そうだ。せつかく上海へ来たんだから、上海の空気を肌で感じないとな」

「あんれえ。オメエでも、偶には気の利いたことゆうんだあ」

「地元じゃ、歩く吟遊詩人とゆわれている」

「歩く赤っ恥じゃねえのかあ」

「じゃーまし」

「歩く顔面性器とも言われているな」

と、峪口が追い打ちをかける。

「だ、ただ、誰が歩く顔面性器じゃ」

「なんだべえ、顔面性器つてのはよお？」

「はっははは……、施川は、これからは顔にパンツを穿いて歩かないとな」

「お、お、むつつり助平の峪口にゆわれちゃった」

「エ口河童だんべえ」

3

“徐家匯”は上海市の中心部から南西に位置し、その中心部に向かって、華山路、虹橋路、肇嘉浜路、漕溪路と五本の道路が集中している。

そんな一角に峪口のマンション“港匯花園”がある。

港匯花園は港匯広場と隣り合っている、経営は香港系財閥で同系列である。

港匯広場は地下で地下鉄一号線の徐家匯駅に繋がっていて、出口も五、六ヶ所あり壮大な地下街を形成していた。

二人は地下街をぐるりと一周してから、峪口のマンションとは華山路を挟んで反対側に位置する“太平洋百貨”^{デパート}の店頭に出た。

「このデパートは香港系でとても人気が高い。中国の主な都市にはほとんど出店しているんじゃないかな。変に気取ってはいないんだけど、地場のデパートとは明らかに一味違う。俺なんかでも買い易いし、雰囲気がいんだよ」

「どうもデパートっていやだよな。気取り過ぎていてさあ」

「俺もデパートはでえ嫌^きれえだ。ふんでも、かあちゃんはでえ好きなんだよなあ。なんで女って、デパートがでえ好きなんだべえ。

俺あいつも駐車場へ車停めて、パチンコ屋で待ってんだあ」

「わしは絶対には行かん」

「俺も結婚したばかりは行っただけど、もう何十年も行ってないな。直ぐに頭が痛くなるんだよな。どうしてかなあ？」

「わしもどうしても行かなきゃなんねえときは、独りで行って、サツと買い物して帰って来るんだ。十分もあれば終わる」

「そうだろう、俺も同じさ。ほら、向こう側に“東方百貨”って書いてあるだろう。あれもデパートなんだけど、なにか買いにくいんだよね。もう二年も住んでいるけど、買い物に行ったのはたった一回だけだ」

峪口は太平洋百貨とは対角線上に位置するデパート、東方百貨を指差した。

「ふーん、それでよく潰れないなあ」

「客は峪口だけじゃあんめえよあ」

「おつ、邑ちゃん今日は冴えている。ところで、こっちの地球儀みたいな建物はなに？」

4

「あれか、あれは“美羅城”とゆってナ、携帯電話、眼鏡、アクセサリーショップなど、若者に受けるいろいろなテナントが入っているんだ。そう、レストランもいくつあったな。五階には映画館が三つだったかな？ まあ、ゆうなれば娯楽の殿堂だな。裏側の建物

とも通路で繋がっていて、そこにはコンピューターやゲーム機器、デジカメなどのテナントばかり、上海の秋葉原といったところだ。いつも若者たちで溢れているよ」

「そうゆう場所に、店をだせばいいじゃん」

「わかっているんだけど、大阪方面の人たちがゴチャゴチャとうるさいんだ。“我々は大阪の田舎から始めて成功した。だから、上海でも同じようにしなければいけない”とかなんとかを錦の御旗にして、まったく勝手な連中さ」

「困ったもんだなあ。上海に住んでいる峪口が一番わかっているのにねえ」

「二つ潰されたよ。決まりかけていた物件をね。董事会（株主会）の段階では賛成しておいて、実際に始めようとすると反対だもの。まったく、参るよ」

その後数年して担当者が代わると、今度はまったく逆のことを言いだすのだから、峪口も匙を投げざるを得なかった。

“以前の会社とは違います。人も変わりました。その当時のことを私は知りません”というのが、新任者の言い分だが、峪口から見ればいずれも同じ穴の貉だ。

――染み付いた体質がそう簡単に変わる筈もない。

中国進出を検討中の企業の方々には、もちろん中国側のパートナー選びが大切なことは言うまでもないが、日本企業同士の軋轢は、それ以上のものがあり、許されるならば単独で進出することをお勧めしたい。

特に、東京と大阪の企業が一緒にやることは避けた方がよい、否、避けるべきだと思う。

このことは、作者自身の経験を通して身に凍みて感じたことである。

二、自分の身は自分で守れ

さて、話を太平洋百貨の前に立った三人に戻そう。

「デパートの中も抜けられるけど、そこを右に行けば“衡山路”に出られる、俺のお気に入りコースさ」

「へーえ」

「おい、二人とも信号に気をつけろッ！」

と、峪口が言っているそばから、

「おおっと、危ねえ。気をつけろ、馬鹿野郎ッ！」

慌てて立ち止まって、施川が怒鳴った。

「こっちは車優先だから、青でもうつかり出ると跳ね飛ばされるぞ」

「ふ、ふんとだ。歩道に人がいても、停まらねえ」

「野生の熊に見えるンだろう。おまえ、前に出るな」

「ハゲが眩しいンだべえ」

「はあはははっ……」

実際、日本から着いたばかりの観光客が、タイミングの悪さと日本の感覚で安全を判断することから、横断歩道で事故に巻き込まれることが多々あると聴く。

この、日本ならば、さしずめ新宿に相当する繁華街のど真ん中の交差点に、信号ができたのは峪口が赴任する少し前、一九九七、八年のことである。

交差点のそれぞれの角にはデパートが鎮座しており、広い道路を横切ってデパートからデパートへと買い物客が移動、といった光景がよく見かけられたものだ。

地下道でそれぞれのデパートは結ばれているのだが、上海人には多少危険性を伴っても最短距離で移動する手段が好まれる。

車の混雑は東京並みで、事故の絶えることはない。

しかも車が優先の社会であるから、人身事故も多発することになる。嘘か真か、当時は青信号で歩道を渡っている歩行者を撥ねても、車には責任がなかったようだ。

確かに、峪口も、救急車を呼ぶどころか、倒れて苦しむ被害者を罵倒し、悠々と立ち去る車を目撃したことがある。

二〇〇三年ごろに法が改正され、歩行者が優先されるようになるが、それでも横断歩道を渡っている歩行者を早く渡れとばかりに煽る運転手が後を絶たない。

信号ができて相変わらず交差点での事故が多いので、交通警察の他に監視員が何人も配置されている。

もちろん車だけが悪いのではなく、歩行者、特に大人たちの交通ルール遵守の意識は極めて低い。

親に交通ルールを守る意識が希薄なのだから、子供が守るはずもない。

また、権利ばかりを主張する国民性もあり、人身事故も交通渋滞も一向に減らない。

自分の身は自分で守るという強い意識が、中国で生き残るための最良の方法である。

「ふんとだあ。青でも平気で横断歩道に車が突っ込んで来んだあ。ああ、おつかねえ」

「右折はいつでもオツケーだからね」

「えッ！ そうだったの。どおりで……」

「な、なんだ、前にも言ったじゃないか。施川さん、あんた、上海じゃ長生きできないね」

「ふんとだあ。オメエは慌てんぼうだかなあ」

「わしか、わしはいつも東京で鍛えられているから大丈夫じゃ。それより、熊、おまえこそ気をつけるよ。普段狸や狐と一緒に暮らしている野生動物には、上海の雑踏はきつかるう」

「バゝカこくでねえ。トラクターや耕運機が引つ切りなしだあ。狐は見ねえけど、狸や雉は跳ね飛ばされて死おっちんでるべえ」

「それを拾ってきて狸汁か」

「うん、なかなかつめえもんだあ。って、なにゆわせるだあ」

三人は“天平路”との交差点を無事に渡り、衡山路を東に向かって歩き始めた。

すると直ぐに、今にも壊れそうな古い工場がある。

間もなく解体されて大きな公園になるそうだ。

サミットを控え上海市内に公園を造りまくっている。お陰で最近はいくらか環境が良くなってきた気がする。

工場はおもちゃ工場でもあったのか、入口にウルトラマンの等身大の人形が置かれている。

「ありや、これウルトラマンだよ。ニセモノかな？」

施川が首を捻った。

「ウルトラマンはこっちでも人気がある。会社の連中も、子供のころによく見たって言うてたな」

「へーえ、日本の番組も放映されているんだ」

「ああ、随分昔っからやっていたみたいだな。アニメとかスポコン

……、ほら、アタックなんかやってやつとか……」

「アタック・ナンバーワンか、わしも好きじゃった」

「ドスケベ」

「な、なんでやねん？」

「だってあれだんべえ。女っ子がブルーマで股おっぴろげて、飛んだり跳ねたりするやつだんべえ……」

「そらまあ、学園ものだからな。しかもバレーボールが主題だぜ」

「しかし邑ちゃん、ブルーマにはおでれえたな」

「あんでえ、あれブルーマじゃねえのかあ？」

「確かにそうだけど、俺、久しぶりに聞いたなあ」

「わしも……。でもよ、あれでスケベだなんてゆっているようじゃ、

熊さん家^ちじゃ、女子の水泳とか体操なんかは見ないの？」

「ありやスポーツだんべよお」

「バレーはスポーツじゃねえのか？」

「スポーツのバレーはいいだ。んでも、テレビ番組はエロが目的だんべえ」

「そりゃまあ、多少の色気はサービスだからな」

「視聴率のためだんべえ。それが不純だ」

「けっ、なにが不純じゃ。不純異性交遊みてえな面あ下げてよお…」

「どんな面だあ。オメエは頭にパンツ穿け」

「くくくく…、あの主役をやつてた娘、こつちじゃすげえ人気だよ。なんて言つたかなあ、あの娘？」

「わしも大好きだった。確か、歌手の湯川なんとかと結婚したんじゃないかった？」

「あつ、そうそう、そんな名前」

「湯川秀樹だんべえ…」

「アホ」

路の両側にはプラタナス、この路は歴史のある通りで太い老木が覇を競っている。

工場の対面には鄙びた映画館、これも相当古そうだ。

そして住宅が並び、“宛平路”と交差する十字路の角に幼稚園がある。

「あれは？」

施川が高い鉄柵に囲まれた建物を指差した。

「ああ、幼稚園。上海でも有名な名門らしいよ。月謝もちろん高い。確か、一ヶ月、二千元とか三千元とか聞いたなあ。大卒の初任給並さ」

「三千元（約四万五千元）で聞くと、それほど高いとは思わないけど、大卒の初任給と同じ、ってゆわれるとものすごく高く感じるね」
「だいたいねえ…、そう、八十倍にすれば、中国人の金銭感覚に近いと思うよ」

「ほーう、三千かける八十と、三、八、二十四、二、二十四万円。そりあ、高いわ」

「うんだあ」

交差点を過ぎると、歩道に沿って洒落たカフェバーやレストラン、美容院などが建ち並んでいる。

「お洒落な店が多いなあ」

「この辺は外国人がたくさん住んでいるからね。その所為だろうな」

「俺あ、ゲエ人は苦手だあ」

「外人さんも邑ちゃんも苦手だと思うよ」

「あんでえ？」

「家族総出で考えてみなさい」

衡山路の辺りは、昔はドイツ租界、その後は政府高官などの別荘が集まっていた場所で、現在は上海市民の誰もが憧れる高級住宅街である。

更に数百メートル進むと“？興路”と交差し、右手に地下鉄一号線の衡山路駅へ下りる階段口が姿を現す。

そこから少し進むと、二階建ての瀟洒なバーがどっしりと構えている。

このバーには何度か入ったことはあるが、夜になると白人系の外国人が押し寄せるので、峪口もなんとなく肩身が狭く、落ち着かなかった経験がある。

そのことを施川に話すと、

「うんうん、わかるよ。わしもそうだから、日本人はどうも白人に弱いな。中国人はどうなんだい？」

と言って、邑中の反応を見るように顔を覗きこむ。

「日本人ほどではないが、まあ苦手にはしているね。黄色人種の劣等感かな……」

「虐げられてきた長い歴史が、そうさせるのかも知れませんね」

「げげッ！ 誰かと思ったら、邑中ちゃん。アンタ、今のは標準語だよ」

「ふんとかあ？」

「ふんとだあ。いつ、人間の言葉、覚えた。ところで峪口いゝ、あれはカラオケかい？」

施川が向かいの建物を見上げて訊いた。

その大厦^{ビル}にはディスコとカラオケが入っていて、夜になると若者たちが集い、明け方まで賑わう。

「上海の若者も日本と変わらないんだ。峪口い、夜になったら来てみようか？」

「場違い、場違い。おじさん連中の来るところでは、ごじやりません」

「そうかあ…。わしは、若いおねえちゃんにけっこうもてるンだけどなあ」

「銭つ子払えば誰だつてもてるべえよ」

「自慢じゃねえが、銭はねえ」

「俺あがよく行くスナック“カマトト”のねえちゃん、紹介してやるべえか？」

「スナック“動物園”の間違いじゃねえのか。熊や狸にいくらもててもなあ」

「あれれ、人畜無害を売りにしてるンじゃなかった。ほんとは、羊の皮を被った狼のくせによお」

「ふんとだあ。このエロハゲは放し飼いにできねえ」

「エロハゲ、そりゃひでえな。こんな善良で純情な男を捕まえてよお。へえへへへっ…」

三、ラピズ・ラズリ（群青色）

1

間もなく三人は、衡山路のメインストリートともいえる辺りにやつ

て来た。

「この柵の中は国際礼拝堂。教会さ。土日はすごい人出になるんだ」
「へーえ、中国でもキリスト教は大丈夫なんだ」

「うん。宗教に関しては大らかだな、“法輪講”以外はね。宗教を弾圧すると、国が治まらなくなる。それは歴史が証明しているだろう」

「天草四郎の乱とか、か」

「うんだなあ……、碌なことねえ」

「ところで、法輪講ってなんなのよ？ 以前ニュースでやってたけど、わしにはよくわからなかった」

「あまり詳しく報道されないものな。どうも中国政府に批判的な宗教で、本部は台湾にあるらしい」

「台湾か、それならなんとなくわかる気がするな」

この教会のところで、衡山路は“ウルムチ路”と交差している。

ウルムチ路を渡ると右側に高層の超高級マンション、家賃は最上階のスペシャルルームが月に一万ドル以上と聞いているが、庶民には高嶺の花、敷居が高く確認する術もない。

「確かに高そうだな造りだ。出入する車を見ている、高級外車ばかりなものなあ」

施川が建物を見上げながら呟くように言った。

「俺もこんなところに住んでみたいよ。できれば税金とか会社の経費でね」

峪口が溜息をつく。

「自腹で住めるのは、よっぽど悪いことをして儲けている奴等だろうな」

施川が吐き捨てるように言った。

「儲けている連中に限って税金を払わないモンさ」

「グサッ……」

邑中が俯いた。

「くくくっ…、アンタのことじゃないよ」

左に目を転じると、これまた超高級ホテルリーガル・インターナショナルが姿を現す。

「まあ、ここも俺たちにはあまり、ではなくまったく縁のないホテルかな」

「俺あ家のガキツチヨ（息子）は、今度“帝国ホテル”で結婚式だあ」

「長男坊のか？」

「うんだ。嫁っ娘の家が派手だからよお。俺あ地味だから、その嫌なんだけんどおよお」

「へっ、さいですか。そら、まあ、とにかく、おめ、で、とぉー」

「そうゆうわけだよお、オメエらは呼ばねえかな」

「そうゆうわけってナ、どうゆうわけじゃ？ それにしても、呼ばれないのは嬉しい。なあ、峪口い」

「うんだ。もう結婚式なんて行きたくねえモンなあ。それに、手ぶらってわけにもいかねえしな」

「まっただだあ。まあ、一応訊いてやるけど、費用は一人いくらぐらいかかるんだ？」

「たいしたことねえよお。五万ぐれえのモンだあ」

「ほ、ほんとか？」

「じゃあ、一万てわけにはいかねえな」

「んだべえ、だから呼ばねえんだよお」

「あっ、こいつ、わしらを呼ぶと赤字になるってか」

「ふんなことねえ。仕事忙しそうだから、悪りいから呼ばねえんだよお」

「おっ、舐められたものだねえ、峪口さん」

「ふんじゃ呼ぶかあ？」

「あいや、わしはその日、ちいと都合が悪い」

「まだ、いつつてゆつてねえべえよ」

「いつでもいい、わしはその日都合が悪い」

「俺はその日、具合が悪くなる予定だ。まあ、みんなで楽しくやつ

て頂戴」

三人は勝手なことを言い合いながら、のんびりと歩を進めた。

2

「なにになに、ニチレイ。日本の？」

「そうだよ、施川くん。古い別荘を一戸買いしてリホームしたみたいだ。買ったのは六、七年前らしいから、いい買い物だったと思う。今じゃ、高くても買えないもの」

九十年代の前半なら、信じられない値段で高級別荘が手に入った。上海の不動産価格は二十一世紀に入ると鰻のぼりで、租界時代の別荘などの希少物件や高級マンションは、十年ほどの間に十倍以上になった。

異常な投機熱は、普通のマンションも及び、庶民には高嶺の花になつてしまった。

「先見の明があつたんだね、……それにお金もね」

施川がおどけて言つて、

「はっははは……。そのとおりだ。なにことも、お金がなければ始まりません」

峪口が自嘲気味に言うと、

「んだあ、銭つ子が一番でえじ（大事）だあ。なんだかんだゆつても、銭つ子がねえければ、どうしようもあんめえ。最後は銭だあーッ！」

と、邑中は本気で言い放った。

「邑ちゃん、アンタが言うと迫力があるねえ。“最後は銭だあーッ！”か、わしに少し貸してくれ」

「働けッ！」

「あらら、働けときたか。この隣の洋風の赤い建物、お洒落だねえ。これもバー……、ベロベロ、バー、なんちつて」

「ははははっ…、うん、そうだよ。一階がバーで二階はレストラン

だ。いつだったか、梨田総経理に連れて来られて、ばかデツカイ肉を食わされた。レストランはともかく、バーはなかなかの人気でね。客は白人が多いけど、俺たち黄色人種にも対応がいい。経営者は気さくなイギリス人だ」

「黄色人種か、久しぶりに聞く言葉だな」

「シャツ、・・サツ、サツシャー、シャツ、ズ？」

「邑ちゃん、アンタには無理よ」

「はっははは……、”S a S h a、s”。ここを右折するとお洒落なお店が続くよ」

衡山路を右に折れ、交差する東平路を十メートルほど進むと、サツシャーズと軒を並べて、これもお洒落なレストラン“L a p i s・L a z u l i（瑠璃色）”がある。

「ラピ、ラブ、ラブズ、ラララ……」

「邑ちゃん、君には無理だよ。舌を噛むぞ。ラピズ・ラズリ、はい、ゆったんさい」

昨年日本の雑誌で紹介されて話題になったのは、同じ経営の“青龍工房”。

二階がレストランで、同じ建物の一階で焼き物や調度品を販売している。

ラピズ・ラズリは青金石から採る顔料のことで、紫色を帯びた紺色（瑠璃色）、群青のような鮮麗な藍青色をいう。

「去年、娘に焼き物を買ってきてくれて頼まれて、探し回ったよ。ちよつとわかりにくい立地だろう」

「娘か、親父としては娘に頼まれると弱いものなあ。俺もそうだけど……」

「俺あもだ」

「だろう。あの時は必死に探し回った」

その隣もまた、お洒落な生活用品のお店で、値段も手ごろ、この辺りは旅行者にとって、知る人ぞ知る穴場となっている。

「峪口い、上海音楽学院付属小中学校、と、あ、俺あにも読めた。小学校と中学が一緒って意味かあ？」

「うんだ。もう少し行くと、系列の音楽大学もある」

「俺あ、別に興味はねえ」

「熊、なら、黙っとれ。へーえ、ワイシャツの仕立屋さんだ、一枚作るか。なにに、次はタイ料理店かい、うまいのかいな。わしはタイへ行ったことあるけど、トムヤンクンだっけ、スープ。どうもあの酸っぱさが苦手なんだよな」

施川はブツブツと独りごちながら、次々と現れる店舗に興味を示し一言加えていく。

「俺あもダメだ。なんで、酸っぱいんだんべえ？」

と言つゝ邑中に、

「勝手だろ」

と冷たく応じて、施川はドンドン歩いて行く。

東平路には歴史を感じさせる古い建造物が軒を連ねているが、道路に面した立地の良い建物はほとんど改装されて、店舗やレストランに変わっている。

中華料理の“湘菜館”、アイリッシュパブ“The・B・c a r n e g S t o n e”などもそういった建物を改装して使っている。

続いて地元で評判の中華料理店、“席家花園酒店”である。

峪口も一年ほど前に食事をしたことがあり、サービスも良く、確かにうまかった記憶がある。

少し進むと分岐点、東平路を右折すると“岳陽路”、左折すると“桃江路”で、それぞれの路が“汾陽路”と交わっている。

三本の道路に囲まれた小空間がロータリー状になっていて、そこには公園が設けられていた。

公園では老人たちが肩を寄せ合って語り合っている。

峪口たちが桃江路へ入ると、右手にフジ・ゼロックスの建物が路に

面してデンと軒を構えている。

「おお、さすがはフジさん。一戸建てだ」
そこから真っ直ぐ百メートルほど進むと、再び衡山路に出るはずだが、三人は左に折れた。

「あれーえ、さっきのところに戻っちゃった」
東平路である。

眼前にはサッシャーズの赤い建物がある。

「峪口い。……戻って来ちゃったじゃないの。しっかりしてちょうだいよ」

「ふんどだあ。オメエだけが頼りだかな。施川じゃ屁のつつかえ棒にもなんめえ」

「熊、ぜったいたい、オマエさんが迷子になっても探してやんねえかな」

「あ、ダメ、ふんなことゆっちゃいやよ」

上海の道路は網の目のように入り組んでいて、幹線道路以外真っ直ぐな路がほとんどないので、ほんとうにわかりにくい。

ちよつと脇道に逸れて探索をなどと考え、気がつくともんでもない場所に出て、一時間以上も遠回りさせられる羽目になる。

そんなときは、迷わずタクシーを拾うことだ。

三人は慌てて、別に慌てる必要はないのだが、先ほどの公園のころまで戻った。

「そうそう。こっちへ行けばよかったんだ。汾陽路を東に進めばいいんだ」

「今度は大丈夫だろうねえ」

「ふんだ」

「思い出した。今度は間違いない」

四、不公平な不労所得

“太原路”との交差点では、上海芸術研究所の看板を掲げた古い建物が目にとまる。

左側に目を転じると、“復旦大学付属（急診）眼耳鼻咽喉科医院”がある。

年中無休、二十四時間営業だ。

そして真新しい“軽科^{ビル}大厦”、最近できたらしいが、一階には定番の“スターバックス・コーヒー”が店を構えている。まるでゴキブリだ、どこにでも姿を現す。

上海の家賃を高騰させている犯人のひとつで、同業者にとっては、まことに厄介な存在となっている。

隣は駐在者に有名なドイツバー“PAULANER・MÜNCHEN”、各種ドイツビールとショードダンスが売りである。

料理もドイツ風のソーセージやポテトが主体だ。

「おっ、このパン屋さん。中々のレベルだと思うよ」

さすがに施川はパンの専門家だけあって、目の付けどころが違う。入ってみたいという施川の要望に、峪口も同意した。

「喰いてえただんべえ」

「邑中は外で待つてなさい。衛生上良くないからね、野生動物は……。ふーん、上海のパンのレベルもずいぶん上がったな」

「そうだよ。外資系がどんどん入ってきてるからね。今、一番人気は“ブレッド・トーク”だな。店で焼くのを売り物にしているそれが受けてるみたいだよ」

「ああ、それ知ってる。峪口の会社の地下スーパーにあつたじゃない。まあまあだけど、あれは全部焼いているわけじゃないよ」

「そうなの？」

「ムリよ、ムリ。あの設備じゃ無理だよ」

「人間なんか取柄があんな」

「熊、一度死んでみるか」

「そうか。さすがはプロだ」

「でも、この店は確かに焼いているよ。厨房を見せてもらいたいけど、無理だろうなあ」

「訊いてみるよ。……うん、やっぱりダメだつて」

「まあ、当然だろうな。野生の熊が一緒じゃな」

「熊？ どこどこ？」

施川は二、三種類のパンを買い求め、外に出ると早速かぶりついた。やはりプロ魂が騒ぐのだろう。

「うんめえかあ？」

「ほれ、餌」

施川は一口齧って邑中に渡した。

「あつ、きつたねえ。手でおっかけよあ」

「嫌なら喰うな」

2

復興路を横切ると間もなく右側に、高い鉄柵に囲まれた広大な敷地がある。

そこはレストラン“仙炙軒”と白亜の結婚式場で占めている。

「すごいねえ、ここ。まるでヨーロッパのお屋敷だ」

「ふんとだあ。でもオメエ、ヨーロッパへ行ったことあのかあ？」

「わしは二度行ったことがある」

「あんれえ、嘘だんべえ。ふんとかあ、峪口い？」

「うん……、そういえばお土産貰ったなあ、一度」

「おう、イタリアで買った鞆じゃ」

「俺あは貰ってねえ」

「あれえ、そうだっけえ」

「峪口い、オメエは行ったことあつか？」

「俺は残念ながら、まだない」

「うふつ、うふふふつ……俺あ一回行った。ぐっふふふ……」

「勝ち誇ってやがる。この辺りは昔のドイツ租界だ。まだまだその当時の建物が残っているんだよ」

「なるほど、それを改築して使っているわけか」

「数年前までは中国人が住んでいたんだ……。ほら、例えばあの建物」

「うん。あの建物が？」

「どれだよ、どれえ？」

「ほら、あれだよ、あの二階建ての建物……。そうだ。あれで十家族は住んでいるんじゃないかな」

「嘘だんべえ。あんじゃ、何百人も入れねえべえ」

「そうだよ、トイレや台所だって、精々二つか三つだろう」と、施川も同調する。

「ああ、もちろん、共同だよ。以前、うちの従業員の家を見たことがある。大概は一部屋に一家族だ。まあ、何百人は居ないと思うけど。だからみんな、借り手があればここみたい貸したいと思っているわけよ」

「貸したら住むとこなくなっちゃうべえ」

「場所が良ければ高く貸せるだろう。家賃を貰って、自分たちは郊外の安い家賃のところへ引っ越すのさ。それで差額を稼ぐんだ」

峪口は何度が従業員の家に招かれたことがあり、その狭さに驚かされた。

欧米諸国からウサギ小屋と揶揄された日本の住宅も、ここでなら超豪邸と胸を張れる。

部屋の広さは十五平米ほどで両親との三人住い、台所とトイレは隣家との共同使用であった。

更に驚いたのは隣家の家族構成だった。

従業員の家と同じ間取りながら、家族と親類を合わせた八人住いだつたのだ。

“お陰で朝のトイレ待ちが大変”、と従業員の母親は笑った。

住環境に不満はあるものの、屈託もなく、また隣り同士で喧嘩する

こともなく、素直に受け入れているのが印象的であった。

3

「でも、これって国のものだろう」

「あんだあ、国から借りてンのかあ？」

「うんだ。まあ、土地は当然だ、中国では私有が認められていないからね。建物も基本的には国のものだ。僅かな家賃は払っているはずだけど……、月に五十元（七百五十円）とか」

「ご、五十元、たった。ええと……、十家族として、五百元か。まさか、この建物を五百元で貸してるわけじゃないよな。それならわしでも借りられる」

「当然さ。今なら、そうさなあ……、この建物を借りるなら、月に五十万元以上は取られるだろう」

「ということは、五、五、二十五……七百五十万円！」

施川が驚きの声をあげると、邑中也嬌声をあげた。

「な、ななな、七百、五十万円。誰が貰うんだあ？」

「当然、居住権のある人たちさ」

「あんだあ！？ 国じゃねえのかあ？」

「そうだよ。貸したくなるだろう。一ヶ月五十元で、五万元入ってくるんだからね」

「嘘だんべえ。そんなうめえ話がとるわけねえべ」

邑中の顔がマジになっている。

大通りを一步脇道に入ると、道路に沿って小さな店舗がたくさん軒を連ねている。

しかし、それは本来のテナント用物件ではなく、住宅の横壁をぶち抜いたものがほとんどである。

国から借りている住居を又貸しすることで、大きな収入を得ているのだ。

淮海中路の近辺は、路地裏でも賃貸料が平米当り年間一万元（約十

五万円)を超えているので、二十平米足らずの家を貸せば、年間二十万円(約三百万円)を超える収入が入ることになる。

運良く住居が道路に面しているだけで、およそ四百倍の収入をもたらしてくれるのだ。

住人は当然の如くこれを又貸しして、自らは家賃の安い郊外に引っ越す。

こんなことが、今でも野放し状態で行なわれている。

第三章 淮海中路（ワイ・ハイ・ジョン・ルー）

一、公園は憩いの場所

1

そのまま“汾陽路”を真っ直ぐに進むと、左側には楽器店が軒を連ねていた。

「へーえ、楽器屋さんが多いんだね、この辺りは」

「ああ、ちよい先に行くと、ほら、さっきの音楽院系列の大学があるのさ」

「なんだ、そこで楽器屋が多いのかあ」

「それにしても工事の音がうるさいな。これじゃあ、勉強ができないだろう」

「隣が工事中だからね」

音楽院の隣は再開発現場で、動き回るクレーンとともに掘削機のコンクリートを砕く音がけたたましく鳴り響いていた。

道路の右側には“東華師範大学”がある。

「こつちにも大学か、さぞや学業に影響するだろうな」

「さて、お二人さん、その道路が淮海中路だ。上海の銀座通りだ」

「へーえ、この道路が。あれ、あそこは公園だな」

「そう、公園、“襄陽公園”だ」

「寒いのに、いっぺえ人がいんな。爺さんと婆さんばっかだけんど」

「朝方はもつとすごいよ」

公園は一年を通して、早朝から人で埋め尽くされる。

老人ばかりでなく、会社をリタイヤしたばかりの中年層もたくさんいる。

中国の国营企業は定年年齢も早く、女性は大概の場合五十歳で退く。また男性も企業の民営化により、四、五十歳代の人たちが僅かな退

職金で職を失っている。

次の職場が見つかる人はほんの一握りで、大半は無職となる。まだ日本ほどではないにしても、中国も急速に長寿化が進んでおり、その後の長い人生を如何に過ごすかが大きな課題となっている。

住宅事情もあるが、結婚をすると子供たちは家を離れ独立するので、おのずと老夫婦の二人暮らしということになる。

その結果、当然の如く暇を持て余すことになり、朝の早い老人たちは仲間を求めて公園を目指す。

庶民の住居は狭い上に、ほとんどが長屋方式で台所とトイレは共用なので、快適な住環境とは言い難い。

それで雨の日はともかく、天気の良い日は公園に集うことになる。公園でなにをするかというと、ただボーッとベンチに座っている者は僅かで、それぞれが思い思いに運動や麻雀やトランプ、将棋などのゲームをして過ごす。

襄陽公園でまず目に入るのが太極拳に興じる大集団、毎朝百名以上がリーダーの指揮のもと、音楽に合わせて一糸乱れず踊っている。

この集団が公園広場の中央を占め、その周りに大きな扇を手に舞う集団や剣を持って踊る集団、他にも様々な集団がいる。

土日ともなると、ここに家族や友人とバトミントンや麻雀、トランプや将棋などに興ずる人々が加わる。

中には曲芸紛いの技を披露する者、石畳に水を使って筆で漢詩を書く者などが現れ、昼間の公園は立錐の余地もなくなる。

「公園の隣に日本の有名なドーナツ屋さんがあるよ」

「なにに、ドーナツ。俺あでえ好きだあ。食うべえ食うべえ」

「へーえ。出てるんだ。人気はあるのかい？」

「朝晩と土日はけっこう入ってるみたいだけど。どうなのかなあ……」
「峪口は責任者をよく知っており、“商売の難しさよりも、合作相手の日本企業が問題ばかり起こしており、むしろ邪魔な存在となっている”と、嘆いていたのを思い出した。」

「コーヒーでも飲む？」

「うん、行くべえ、行くべえ」
「いらねえよ。わし甘いものは好きじゃねえし……。それに、もう直ぐ昼飯だろう。なんか、美味しいものを食おうよ」
「昼飯は昼飯だんべえ。少しドーナツを食うべよお」
「あんなモンは男の食いものじゃねえ。邑ちゃんデブになるぞ。今でも十分デブだけどお」
「そうするか、昼飯になにか美味しいものを食おう」
と峪口が施川に同意したので、邑中はブツブツ言いながらも不承不承同意した。

2

三人は淮海中路を東に向かって歩き出した。
すると、交差する“襄陽北路”の交差点で、怪しげな男女数名が近づいて来た。

「しゃちよう、しゃちよう。とけいほしいか、バックいらないか、ローレックスあるよ。ヴィトンもあるよ。やすいよ、やすい。だいじようぶ、だいじようぶ」

「不要、不要^{いらない}」

「しゃちよう、しゃちよう……」

「うつせえーッ！ 俺は社長じゃねえッ！」

と強く拒絶しながら、峪口が施川と邑中に注意を促がした。

「えへへへっ…、俺あは社長じゃねえどお」

「こらこら邑ちゃん。社長と呼ばれて脂下がつてるンじゃねえよ。

ここじゃ誰でも社長なンじゃ。喻え相手が熊でも、金持ってれば社長じゃ」

「ハゲでもかあ？」

「あんだと、わしに喧嘩を売ってるのかあ」

「ううん。オラア、バカは相手にしねえ」

「はっはははっ…、そこが“襄陽市場”だ。全部偽物ばかりの店だ

よ。その門から向こうの通りまでの一角がすべてそうさ。四、五百店舗あるんじゃないかな。お陰でこんな具合に、この辺りは客引きが多くて困っているんだ」

「そんなのが、こんな街の中心にあっているのかよ。それにしてもほんとにしつこい連中だ。シッシッ！」

施川が手で追い払った。

それでも、“しゃちょうさん、しゃちょうさん”と食い下がってくる。

「俺あ、社長じゃねえってばあ」

「馬鹿、構うな」

「旅行雑誌にも紹介されているし、半ば政府公認だ。区に税金が落ちるからな」

「この連中が税金なんて払うかね？」

税金は店舗単位で決められていて、売上には関係なく徴収される仕組みになっている。

「権利を持っているのはこの連中じゃないよ。利に敏感な連中がしっかり握っているんだ。あんがい役人連中も絡んでいるんじゃないのかなあ」

偽物市場は、二〇〇一年に“華山路”からこの場所に移転してきたのだが、最初の権利金は月額三万元（四十五万円）だったと聞いている。

それが又貸し、又貸しの又貸しによって、十平米ほどの面積が今では十万元を超えているとのことだ。

「どうせ領収書なんてないんだろう。どうやって売り上げを確認するんだよ」

「ないない。レジなんかあっても意味ないしね。打たなきゃいいんだから。デパートにはレジ専任の人がいるんだけど、売場の連中と組んで適当に売上金を誤魔化しているもの」

「どうしようもないな。見張りにまた見張りをつけて、そのまた見張り。制限なしだな」

呆れたとばかりに施川が言った。

「ははははっ…、そうゆうこと。この国では誤魔化さない人を探す方が難しい。デパートもその分を見込んで価格に転化しているってことだよ」

そんな話をしていると、絶えず客引きが群がり、しゃべらなくとも日本人とわかるらしく、日本語で話しかけてくる。

二、堂々たる偽物市場

1

上海のと真ん中に襄陽市場があり、襄陽公園とは淮海中路を挟んで真向かいに立地しており、五、六千平米の敷地に四百軒以上の店舗が軒を連ねている。

ここの商品は全て偽物で、世界中のブランド品のしかも最新デザインのもものが売られている。

観光名所になっていて、毎日数万人の買い物客でごった返していた。欧米人や日本人などの観光客もたくさん訪れ、どう使うのか山のよきに商品を買って込んでいく。

上海に旅をしてこの近辺にさしかかると、

「ともだち、ともだち、とけいはどう？ ローレックスあるよ。かばんもあるよ。みるだけ、だいじょうぶ」

と日本語で声を掛けられて、パッチワークされたパンフレットを突きつけられる。

でも、いかがわしい、信用できないと思わないでいただきたい。なぜなら、彼らは必ずこう付け加える、“にせもの、にせもの、ぜんぶにせもの”と……。

彼らは堂々と偽物を偽物として売っているのだ。

驚くのは客引きたちのプロ根性、日本人には日本語、韓国人には韓

国語、白人には英語となるが、これらの言葉を見事に使い分ける。この偽物の品質について、こんな話が実しやかに囁かれている。上海にある米国系有名ホテルのブティックで売られていたブランド品の三割が偽物であった。

この話には落ちがあり、ヨーロッパの本店から調査員が来た際に、“これでは仕方がない。本当に良くできている”と、言ったと言わなかったとか……。

もしも欲しい商品があったなら、次の点に注意するとよい。

外国人と中国人では価格の提示が最初から違うので、半額になったという喜んではいけない。

外国人は最初から二、三倍は吹っかけられているからである。

しかし、価格は本物と比べれば数十分の一といったところ、騙されたと目くじら立てずに、決して日本で味わうことのできない駆け引きの妙を楽しみたい。

商品は雑把にいうと、品質によってA B Cの三ランクに分けられている。

店頭に並べられているのは、運悪く没収されてもあまり痛手を蒙らないBかCランクの商品ばかりだ。

品質の良い？ Aランクの商品は、普通は店舗に置いてなくて、もつと質の良いものをと客が要求すると、店主はサッと携帯電話を取り出す。

五分も待つと大きな荷物を抱えた男、或は女が現れて店の奥に入るように促され、あなたの前に煌びやかなブランド品がご開帳される仕組みである。

そこまでさせたら買わないと悪いかな、と思う必要はまったくない。また彼らも、あなたが買わないからといって腹を立てることもない。

2

これらの商品の品質が本当に良いのかどうかは、自身の目と勘が頼

りとなることは言うまでもない。

また、帰国の折に税関で没収されたとしても、これは自己責任の範疇と諦めていただくほかはない。

仮に無事税関を通り抜けたとしても、家に帰ると大きな難関が待ち構えている。

それは、女性たちの嫉妬に絡んだ疑惑の目である。

「まあ、お高かったンでしょう？」

「ええ、まあ、おほほほ……」

「でもおかしいですわねえ。そのタイプは、まだ日本には入っていないはずですけど……。どちらで買い求めになられたのかしら？ 私も欲しいわあ」

さあて、困った。

上海でとは言えず、フランスへ旅行に行った友達に、或は個人貿易でなどと、なんとかその場を取り繕っても、翌日には“奥様奥様ほら、〇〇さんのヴィトンのバック、どうやら偽物みたいですよ”といった噂話が、ご近所中に広がっているはずである。

こういった追及に、あなたが一体どこまで耐えられるか、度胸のある方はお試しあれ。

恐らく、普通の神経の持ち主であるあなたによって、そのバックは数日でダンスの奥く深く仕舞い込まれ、二度と日の目を見ることはないであろう。

なお、この偽物市場は二〇〇六年六月末をもって閉鎖されたことになっているが、実は国際的な批判をかわすために数ヶ所に分けて移転されただけである。

今でも淮海中路を襄陽公園に向かって歩くと、以前にも増して、客引きに出くわすこと請け合いである。

偽物の販売で甘い汁を吸っていた残党が、近くに部屋を借り商売を続けているからです。

そのしつこさは以前の比ではなく、いきなり腕や肩を掴んでくる輩もいる。

それだけ必死ということなのであろうが、このときは遠慮なくその腕を振り解き、怒りを露わにしなければならぬ。

そうしないと、どこまでも付き纏われることになる。

中国では何事においてもあやふやにせず、意思表示をはっきりすることが肝要である。

三、怖い体験

1

「ほらほら、不要、不要。……触るなッ！ なにが友だちだ、ふざけんじゃねえッ！」

峪口の剣幕に恐れをなしたのか、客引きは二人のもとを離れて行った。

「あんまり怒んなよあ、峪口いゝ。喧嘩なんべえよあ」

「ほんとに珍しいなあ、峪口がそんなに怒るなんて。わしならともかく」

「いやいや、あやふやに対応していると、いつまでもくつついてくるしね。それに、身体に触られたら本気で怒らないと、下手すると財布を抜かれるからな」

「なにッ！ ほんとうかよ。そりゃあ、ヤバイ」

と同時に発して、施川と邑中はバツクを抑えた。

「肩に掛けないで、首から前に提げた方がいいぞ」

峪口は赴任当初、肩から後ろに下げた鞆を何度か狙われたことがある。

一度目の時は、鞆に違和感を感じ振り向くと誰もいない、少し離れて女の子がついてくるだけ……。

不審に思いながらも、そのまま歩いていると、前から来た女性がアッと言うような驚きの表情をした。

峪口がとつさに振り向くと、後をついて来ていた女の子が、まさに鞆から物をつかみ出したところだ。

「なにするんだッ！」

反射的に峪口は怒声をあげていた。

するとその少女は、つかみ出した物をサツと植え込みに投げ捨て、アツという間に道路を横切って反対側に逃げ去った。

植え込みに目をやると、見覚えのあるキーホルダーが目に入った。紛れもなく、それは峪口のものであった。

拾い上げ、注意を促してくれた女性に礼を言って振り返ると、すでにその少女の姿は消えていた。

「へーえ、そんなことがあったんだ。そんな小さな子がねえ」

「でもね、会社で従業員に言われたけど、追いかけてちゃダメだって」
「諦めろってこと……。なんでやねん？」

「近くに必ず仲間がいて、よくて袋叩き、場合によっちゃ刺されるってさ。それは公安（警察）が言ってることらしいよ」

「恐っかねえ国だな」

邑中が首を竦める。

「二度目はもつと恐かった……」

「なぬっ……」

2

「ふんにやッ！ まだあんのかぁ。ど、どんなだ？」

「鞆を切られた」

「あんだとお…、トバ（ナイフ）でかぁ？」

「うんだ。こっちも油断してね。鞆をこう後ろに回して、肩から下げていたんだ」

峪口は二人に、バックの紐を持ち、背中に背負う格好をして見せた。

「恐っかねえ……」

邑中が恐怖に顔を引き攣らせ、辺りをキョロキョロと窺った。

「それで？」

施川が先を促す。

「あれは“新疆ウイグル系”だな。顔つきが漢民族とは明らかに違ったからね。トルコ系っていうのかな、彫りの深い、目鼻立ちのはつきりとした。……こっちは若い男だった」

「確かにトルコ系は、目鼻立ちのはつきりした可愛い顔をしているよな」

「エ、エゾキチックだんべえ」

「偉い偉い、よく言えた。はい、角砂糖。でも、エキゾチックだろう」

「うんだ。俺あでえ好きだ」

「なにが、男がか？」

「馬鹿か、オメエは。女に決まってンべえよ」

「君の場合は“雌”だろう。それでどうした？」

「うん、背中に殺気を感じたわけよ。で、俺がパツと振り返ると、ここ、この辺りに、そいつの無表情な面があつて。いやあー、びつくりしたよ」

そのとき峪口は、咄嗟に匍を胸元に抱え込み、その男を睨みつけた。するとその男は、なにやら言葉を発してクルリと踵を返すと、悠然と立ち去った。

“その連中こそ本当に恐い連中です。夜でなくてよかったですねえ”と、後で従業員から聞かされ、背筋を冷たい汗が伝った。

彼らは子供でもナイフを持っていて、中には口の中に小さな刃物を潜ませている、まるで奇術師のような輩もいるとか……。

施川の顔から笑いが、邑中の口から言葉が消えた。

「避ける方法はただひとつ。油断や隙を見せないこと、これしかないそうだ」

邑中がしっかりとバックを抱え込んだ。

四、大都市の戸籍と地方の戸籍

1

「ふーう。やっと客引きがいなくなった」

三人は“陝西南路”を渡つて、ようやく一息ついた。

陝西南路で区が分けられていて、偽物市場があるのは“徐匯区”、陝西南路を跨ぐと“慮湾区”になる。

慮湾区は、上海市政府のお膝元ということもあつてか、物売りや客引きなどに対する取り締りがとても厳しいのだ。

それで慮湾区に入ると急に静かになる。

偽物市場の外にも、道端で敷物の上や自転車、リヤカーの荷台などに品物を広げた物売りがたくさんいる。

大概是、偽ブランド品や偽のDVDなどであるが、近年のペットブームを反映してか、中には子犬や子猫を売っている者もいる。

DVDは、米国製映画なら米国での封切りとほぼ同時に店頭に並ぶ。当然品質は劣るが、十元（百五十円）前後と安いのと、とにかく早く見られるのが魅力で、店頭はいつも賑わっている。

この国では、レンタルショップはまず成り立たない。

この物売り連中が、公安や鼠（鼠色の制服）と呼ばれる風紀を取り締まる見回りが来ると、蜘蛛の子を散らすように、アツという間に消えてしまう。

しかし彼らは強かだ。

区の境を越えれば取り締まりの権限が及ばないことを知っているの
で、道を隔てた別の区に移動して商品を広げる。

陝西南路と“長樂路”も徐匯区と慮湾区を分ける境で、毎日そんな
イタチゴッコが繰り返されている。

では、両方の区で一斉に取り締まりをすれば、とお考えになる方も
いらっしやるでしょう。

しかしそこは中国人、窮鼠猫を噛むに至らぬように、徹底的に追い

詰めることをしない。

なぜならば、彼らのほとんどが農村からの出稼ぎで、上海の戸籍は持っておらず、定職につくことができない連中だからである。もし取り締まりを徹底して、完全に収入源を奪ってしまうと、彼らが悪の道に走ることを上海市政府はよく知っている。

2

中国人にとって、戸籍がどこにあるのかは極めて大切なことである。上海の戸籍がないと、能力があっても上海でまともな職業につくことはできない。

それはどこの都市も同じで、その都市の戸籍を持たないと、中々良い仕事にありつくことができない仕組みになっている。

しかも、地方の人間が大都市の戸籍を取るとはかなり難しいことである。

但し、例外的に戸籍を取得する三つの方法が認められている。

一つ目は、重点大学といわれる一流大学を優秀な成績で卒業することである。

二つ目は、企業に与えられた枠（資本金の額により異なる）を使って戸籍を取得してもらう方法である。

国営企業では、この枠が悪用されることが間々にあるらしい。

三つ目は、紅衛兵の嵐が吹き荒れた当時の改革開放政策によって、地方に追いやられた人たちの子供だけに与えられた特権である。

その人たちの出身地の戸籍が子供に与えられるというものだが、この方法は、逆に社会に大きな歪みをもたらしている。

なぜならば、子供だけに与えられる権利であるから、親はその地に留まることになり、祖父母や親戚を頼って幼い子供を都市に送り出すことになる。

まあ、そのくらい都市生活に魅力を感じているということだが……。その結果、幼いときに親元を離れ、両親の愛情を知らない子供たち

が大都市にたくさん誕生してしまった。
こんな境遇の子供たちが、大都市にはたくさんいる。

五、刺激的なポスター

1

「さあ、ここからが慮湾区、物売りはいなくなるよ」
「ふんとだあ、なんでえ？」

「こちら側は上海市政府のある区ということで、取り締まりがとても厳しいんだよ」

「へーえ、そうなんだ。面白いね、道路一本でね」

「結構区側に権限が与えられているからな。まあ、出来合いだろうけど」

「ふーん……」

「これ、この建物が^{デパート}巴黎春天、お洒落だろう。あっち側が^{デパート}百盛広場で、その隣の建物の二十階にうちの会社のオフィスがあるんだけど。どお、寄ってみる？」

「マツクの上かあ」

「おつ、邑ちゃん、生意気にマツクときたか」

「いいよお、行かなくていいよお。今日はみんな仕事だんべえ。
なあ、施川あ……」

「うん、わしも同じ」

「そうだな。止めておこう。ほら、向こう側を見てみな。その広場の後ろの方、森みたいにこんもりしているだろう」

「うん。わしみたいにモツコリしている。邑ちゃんには負けるけど」

「なんじゃそりゃ。バゝカ、スケベ」

「そこが花園飯店の庭で、市民の憩いの場にもなっているんだ。昨日の晩、梨田総経理に御馳走してもらったのがこのホテルさ」

「なあんだ。そうだったのか」

「日本の野村證券と隣の錦江飯店（地元資本の五つ星ホテル）との合併で、運営は日本のホテルオオクラ」

「へーえ、どおりで……」

「俺あ家の結婚式は帝国ホテル……」

「わかったわかった」

「そう、だからサービスは最高だし、チップを渡しても受け取らないよ。それは、中国ではとても珍しいことなんだ」

「わしの泊まるホテルとはだいぶ違うなあ。チップを渡すまで部屋を出て行かねえ……」

「とは言っても、時々受け取る者もいるけどね。そこが難しいところなんだよな」

「わし、チップ制は別にいいと思うなあ。日本人には抵抗があるけど、世界では当たり前だろう」

「俺もそう思う。ただ、習慣や社会の仕組みの違いとわかっていても、米国みたいに料金の何パーセントを必ずっていわれると、抵抗がある。気持ちなんだよ」

「俺あ宿屋へ行くと、ていげえ三千円渡す」

「へいへい、おまえだろう、モーターで心付を渡したのは」

「あんれ、施川、オメエはなんで知ってるんだ？」

「好きにしてくれ」

「最近、女中がコロコロ代わつからしうがねえな。こねえだは三人に渡したる。ふんなとき、オメエらはどうすんだあ？」

「わしか、わしは最初から渡さねえな。サービス料に含まれているんだから、渡す必要はねえだろう」

「米国みたいに、額が少ないって、露骨に嫌な顔されるのも頭にくるな」

「そうよ、気持ちよ、気持ち。それで世の中、丸く収まる。熊みてえに、やたらと銭を渡したがる奴がいるから困るんだ」

「勝手だんべえ」

「邪魔なら、わしにくれ」
「そんぐれえなら、ドブへうつちやる」
「そうか、じゃあそのドブへうつちやれ。わしが拾ってやる。ほれ、早くしろ」

2

「聞いたところによると、この花園飯店の合併期間は二十年間、その後一ドルだか二ドルだかで、中国側へ譲り渡す契約なんだそうだ」
「この三十三階建てのホテルが二ドルッ！ ああつ、おろろいた。おろろいた。十倍出すから、わしに売ってくれないかな。なんなら百倍出してもいい」

「俺あなら、ひゃ、百万倍でも出す」

「おつ、思い切ったな。日本円でいくらだかわかっているのか？」

「二、三百万円だんべえ……」

「二億じゃ、ボケッ！」

「ちつくら土地動かせば、問題ねえ」

「ちつくらか……」

などと馬鹿な話をしながら歩いているうちに、三人は“茂名南路”の交差点に到達した。

「おつ、おおおお、おつ……。あれ？」

施川の目が一点に集中、目はまさに点になっている。

人差し指が反対側の『古今』という看板の掲げられた店を指し示した。

「な、なななな、なんだあ？」

女性下着の老舗で、中国中に支店を持っている。

「大胆だなあ、あのディスプレイ。人形とはわかっていても赤面する。ああ、純情なばくにはとてもまともに見られない。だから向こう側に行ってもう少しよく見ようか」

と施川がおどけて言った。

「ほれ、邑ちゃん行くぞ」

「いんねえよお…、俺あ、恥ずかしいべよお」と言いつつも、足は既にそっちへ向いている。

上海の女性下着の店舗は、規制が緩いのか、どこも際どいディスプレイがショーウィンドーを飾っている。

マネキンも如何にも人形然としたものではなく、より人間に近いリアルなものを使っているの、突然目に飛び込んで来ると思わずドキツとさせられる。

ポスターもそう、中には男性誌のグラビアに載せた方が、と思われるものもある。

「すつ、すつごいなあ。場末のストリップを見るより興奮するよ」

施川は声を潜めて言った。

「うんだあ。ストリップよりもすんげえ…」

「なんだ、邑ちゃんも行くのかストリップ？」

「あつ、ふん」

「どすけべ」

ショーケースにジッと見入る施川、チラチラと目線を送る邑中、峪口も思わず際どい部分に目がいく。

男には少々目の毒である。

「なんだか、下半身がムズムズしてくるな。あれッ！ 熊、アンタ起つてない」

施川が邑中の下腹部に目線を投げる。

「ね、ねえよ。俺あこの程度じゃでつかくなんねえ。それより施川、オメエだんべえ、チンポおっ起つてんのは」

峪口は半立ち状態の下腹部に、落ち着けと命じた。

そつえば单身赴任の所為で、暫くすることをしていないと思った。下世話で恐縮だが、上海では、薬局の店頭で若い女性がコンドームを堂々と品定めしている、そんな姿をよく見かける。

まあ、必要なものだから、当然といえば当然のことだが、男にはなかなかできない。

茂名路を横切ると淮海路は一気に華やき、高級ブティックや高級ブランド店が建ち並んでいる。

「一気に高級になるな、この辺りは。日本の銀座といった感じかな」
「銀座とゆうより銅座ぐれえのもんだべえ」

「はははっ…、銅座ときたか。上海の六本木と言われていて、この辺りは家賃も高く、並の飲食業じゃ借りられないんだ。粗利の高い商売ばかりだろう、貴金属店とか」

「六本木ねえ……。そんなに高いんだ家賃は？」

「精々四本木だんべえ」

「おっ、邑ちゃん今日は冴えているねえ。高い、高い。うちなんか手も足もでない」

この辺りの家賃は、一平米、一日当たりハドルとか十ドル（例えば、百平米で月の家賃は四百万円ぐらい）が相場だが、なかなか空きが出ないのが現状である。

「“全聚德”……、どこかで聞いたことがある名前だな、はて？」
と、施川が呟いて首を捻った。

「“北京ダック”で有名な店だ。本店は北京の天安門近くにあるんだ。機会があったら北京へも行こうよ」

「ああ、ぜひ行ってみたいね」

「俺あも誘ってくんど。んでも農閑期な、農閑期」

「よし、三人で行こう。上海は見所が少ないモンなあ。周りには“杭州”とか“蘇州”とか、いろいろな観光地があるんだけど……」
「行こう、明日行こう」

「うんだあ、行くべえ。峪口、オメエ手配しろ」

「明日！？ まあ、今回は上海観光で我慢してくれよ。次に来るときはセットするよ。それに明日は、こっちの友だちと一緒に食事をする事になっているから」

「友だち？ お、女か？」

「ああ、女性だよ」

「お・ん・な……」

邑中が眉根を寄せた。

「熊にカツラを被せたようなんじゃねえの？」

「おえーッ！」

「おつ、自分でも気持ち悪いいか。うん、わかる」

「ははははっ…、邑ちゃん面白いねえ。れっきとした女性だよ」

「ほんとか。嘘じゃねえだろうな」

「嘘じゃないよ、施川。周麗さんといって、以前世話になった人なんだ」

「なっ、なんの世話になったんだよ。ははーん、現地妻だな」

「チンポ触ってもらったのかあ。なんだよお、峪口も施川と同じスケベかあ」

「アホ。仕舞いにや怒るぞ。彼女は復旦大学という、上海一の名門大学出身の才媛だ。その上日本語もペラペラ。本当は会わせたくなかったんだけどね」

「よし、今回は上海で許してやる」

「なにが、許してやるじゃ」

女性と聞くとコロリと変わる、実に現金な男である。

「めんどくせえなあ…、女はいんねえよお」

「なんとゆうことを、もったいない。なあ、助平口」

「すけべぐちだと、施川、おまえにだけには言われたくねえな。と
ころで、そろそろ昼飯にしない」

「そうすべえ」

六、焼肉の“神田”

「どう、直ぐそこに焼肉屋があるんだけど」

「ふんとだあ。助平川」

「なんだとお、デカチンのムツツリど助平えがあ」

「小^{ちう}ちやいよりはよかんべえ」

「悪うござんした。どうせ、わしのは小さい。早い、小さい、不味
いって、女房にいつもゆわれてる。ゆわれてねえよッ！」

「へえへへへ……」

「おつ、また勝ち誇りやがった。焼いて食うぞ、その無駄にデツカ
イチンぽこ」

「峪口、止めてくれ。考えただけで食欲がなくなる」「その焼肉屋
つてのは、うんめえのかよあ？」

「邑ちゃん、結構うんめえよ。ほら、その路地を入ったところだ」

「俺あ、うんめくねえと駄目だあ」

「峪口い、邑ちゃん用に豚の頭でも用意してくれ」

「生でいいか？」

「十分、十分。なんなら、客の食い残しでもいいぞ。なにに、焼
肉、“神田”、か？」

「そう、そこ。駐在員の間で人気の店だよ。友だちの張さんに教え
てもらったんだ。元気のいいママさんがオーナーでね」

「ママさん、美人？」

「うーん……美人、とは言わないけど……」

「なんだ、つまんねえな」

「オメエはそんだけだなあ。だから“エロハゲ”ってゆわれるんだ」

「じゃかまし、誰がゆうンじゃ」

「俺あ……」

「ははははっ…、とても気風のいい女性で、なんでも神田に住んで
いたことがあるらしいよ」

「そうなの、それで神田か。じゃあ、うちの会社とはお隣さんだ」

施川の会社は、東京の神田に本社を構えている。

「そんなら入ってやるか、峪口の顔を立てて。でも、奢りなっ」

「はいはい、わかりましたよ。御馳走致しましょう。その代わり明日は頼むぞ」

「うん？ …… 失敗だったかな」

「いいよお。俺あが銭つ子出すからよお」

「おつ、そいつはありがてえ」

「峪口の分だけだけんどよお」

「あらあ…」

焼肉神田は、日本帰りの中国人姉妹が経営している。

峪口が友人の張威に紹介を受けたころは、あまり知られていないこともあつて閑散としていた

だが、近ごろは味とママの気風が評判となり、日本人だけでなく中国人の常連客も多い。

夜ともなると、予約なしでは入れなかった。

メニューを見ながら施川は、

「写真を見る限りはうまそうだ。それに値段も安い」

「けっこう良い肉を使っているよ。なによりも従業員がよく教育されていて、実に気持ちがいいんだ。会社の連中にも見習って欲しいものだ」

「うん。確かにみんなニコニコと対応がいいね。わしがウダウダ言っても、嫌な顔をしないもんな」

「なんだ、わかってンじゃねえか。まんざら馬鹿つてわけでもねえな。うん」

「熊、オメエのその無駄ッ腹、焼いて食うぞ」

「はっははは……、それも人気の秘密だな。それに、ここはオープンから従業員がまったく変わらない」

2

「へーえ、よっぽど待遇がいいってことかな？」

「待遇は特別いいとゆうわけじゃないみたいだけど、ママさんだらうな。彼女の力だと思うよ」

峪口の会社では、設立以来、僅か二年の間にいったい何人の者が去って行ったことか、両手の指を折ってもまだ足りない。

基本的に労働契約の期間が一年ということもあるが、大きな理由として、上海には外資系企業の参入が相次いでおり、外国語（英語、日本語）ができて、外資系企業での就労経験を持つ者は引っぱりだこという状況があげられる。

会社を移ることで収入が五割増、或は二倍などといったことも珍しいことではない。

従業員から退職したいと意思表示があつたときには、すでに次の行き先を決めているのが普通で、引き留めようとするとするなら、転職先の給与を凌ぐ条件を出さなければならない。

しかし企業には、給与規定がありできるはずもない。

また、本人が考えているほど能力的に優れているわけでもなく、規定を崩してまで無理に引き留める必要もない。

結局、引き抜いた側も一、二年後には同じ悩みに直面することになる。

日系企業同士がお互いに首を絞め合っている。

上海人の職業に対する考え方は極めて欧米的で、個人主義が如何なく発揮される。

それは徹底されていて、会社のため、同僚のためなどといった意識や愛社精神を培うのはとても難しいことである。

「いやあ、食った、食った。満足、満足。値段を聞いてもつと満足」
焼肉をたっぷり食って、酒をしこたま飲んで、料金が五百元（7500円）と聞いて、施川は悦にいつている。

「オメエが払ったンじゃあんめえよあ」

「邑ちゃん、ご馳走様でした」

腰を九十度に折って礼を言った。

「こんなときだけ愛想がいいなあ、オメエはよあ」

三人が神田を出て淮海中路に戻ると、時刻は午後二時を指していた。

「飲んだら歩くのが億劫になったな」

と、酒で顔を真っ赤にした施川が愚痴った。

「“豫園”にでも行ってみるか」

峪口の頭に、突然“豫園”の文字が浮かんだ。

「よえん、……わしは十分酔った」

施川は駄洒落で応じた。

アルコールが入ると、軽口がポンポン飛び出す。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8858x/>

半枯れトリオの旅日誌【中国・上海編】

2011年10月26日15時06分発行